

改変

さ
れ
た

世
界
の

片
隅
で

メイド・大山チトセ編

夜空さくら

Tiasti



DOJIN

R18

成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

改変された世界の片隅で・メイド犬山チトセ編 目次

序章	封入されたメイドたち	2
第一章	メイドの身支度とお仕事	8
第二章	寵愛とお仕置きの違い	16
第三章	貞操帯でメイドを管理する	23
第四章	メイド長特製ブレンドドリンク	29
第五章	薬品による快樂とお預け	35
第六章	愛しき旧友との邂逅	42
第七章	水で固定されるメイド	50
最終章	メイド・犬山チトセへの罰	58
後日談	封入されるメイドたち	69

特典・表紙イラスト差分

あとがき・奥付

序章 封入されたメイドたち

目を覚ますと、目の前は透明な壁に覆われていました。透明な壁は眼球の曲線に合わせて歪曲しているため、外の景色は、若干歪んで見えています。

私の視界には、綺麗に磨かれ、反射して景色が移り込みそうなほどに綺麗な廊下が見えていました。

廊下の壁に水平に立っている私がいる方とは反対側の壁には、立派な額縁に入った絵が掛けられています。

それは、メイド服を着た使用人の肖像画でした。

高名な画家に描いたそれは、独特の味がありながら、モデルとなった人物の判別がつかくほどに精巧なものです。

世界に一枚しかない絵を用意してもらえているのですから、そのモデルにとって非常に光栄なことでした。

絵に描かれたメイド——つまりは私なのですが。

目が覚めると自然に視界に入る場所にその絵が置かれている理由は、毎日その絵を見ることで、使用人としての自分を見つめ直すためだとか、自分の立場を自覚させるためだとか言われています。

けれど、本当はそんな理由ではなく、ただ——選びやすくするためなのでしょう。

私は眼球だけを動かし、視線をずらしてみました。

私の斜め前には、別のメイドの肖像画が壁に飾られています。彼女は同時期にこの館に雇われたメイドで、一応同期ということになるのですが、名前も知りません。

一日のうち、割と長い時間、ほぼずっと隣にいるわけですが、いまのところ彼女と話をしたことがないのです。

彼女はご主人様の好みではないのか、この場所からほとんど『解放』されていないのです。

好みでないならなぜ雇ったのか疑問ですが、ご主人様にも色々としがらみがあるのかもしれない。

特権階級の方々の考えや風習はよくわからないことが多いので仕方ありません。

益体もないことを考えるのをやめ、せっかく本来の目覚めの時間よりも早く目が覚めたのですから、いましか出来ないことをすることにしました。

私は現在、両足を揃え、背筋を伸ばした状態で、両手を身体の前で重ねる、というメイドの基本的な待機姿勢でいました。

本来なら立ったまま寝る、という器用なことは出来ませんが、それを可能とする理由があります。

私は——いえ、私たちは、透明な材質で出来た人型の中に閉じ込められて夜を過ごしているのです。

その材質の詳細はわかりませんが、アクリル板やガラス

のように透明で、とても頑丈です。

私の身体の形に合わせて、寸分違わぬように設計されており、中に閉じ込めている者を——つまりは私を、ほぼ隙間なく覆っています。

液体状態で塗られたわけではないので、コーティングされているわけではないのですが、ここまで隙間がないとその表現のほう正しいように感じてしまいます。

一部を除いて隙間は全くなく、足の指先すら動かさないように、作られています。

身体に合わせて作られているため、当然ながら全裸なのですが、こうしていて寒いと感じたことはありません。

屋敷の中は常に空調が利いていますし、謎の材質で全身覆われていますからね。少し暑いと感じることはあっても寒いと感じたことは真冬でもありませんでした。

なお、呼吸に関しては鼻の部分に穴が空いておりますので、問題なくできます。

この密着度合いが、例え全身を脱力しても動かさない要因になっており、私たちは立ったままでも寝ていられるというわけです。

逆にどれほど力を入れても動けないので、ここに入られた時点で内側からの脱出は不可能でした。逃げ出そうとするわけがないので、意味のない話ではありませんが。

私を含むこの屋敷の使用人たちは皆、夜間はこうして全裸になって、透明な人型に封じ込められて過ごすのです。

この館に勤めることになった当初は、この就寝姿勢がかなり辛くて、満足に眠ることが出来ず、ふらふらの状態で日々の仕事をしなければならなかったものでした。

いまだにご主人様に多少の『いたずら』をされても眠り続けられる程度には、この寝方にも慣れてしまいました。人間の適応能力とは恐ろしいものです。

さて、身体にフィットした透明な人型に押し込められているという状態なわけですが、この状態でも私に出来ることはいくつかあります。

まず、見ることに。

当たり前ですが、眼球に当たる部分は完全にフィットしているわけではなく、ほんの数センチ遊びがあります。

これによって、瞼の開閉と眼球の動きは妨げられておらず、ある程度の視野角の確保と、透明な壁を通してではありませんが、周囲の状況を把握することが出来ます。

また、ご主人様がそれをしようとすることが滅多にないので、ほとんどしないことではありますが、瞬きの回数や速度を用いれば簡単な意思の疎通も可能です。

そしてもう一つ。

私は両手を身体の前で重ねています。

透明な人型は、私の身体が一番外側の線に沿って作られているため、重ねている上の手は自由はほとんど利かずとも、下になっている方の手は多少自由が利きます。

自由、とはいえ指先を曲げ伸ばしできる程度で、自由が

利くと言っているのかはわかりませんが、私にとって指先が動くだけでも十分でした。

なぜなら、その目的は秘所を触ること——自慰をしたいだけだったからです。

他の身体の自由が全く利かない中、そこだけが自由に動き、自分で自分を慰めることができるのです。

これはご主人様によるご厚意でした。

勤め始めた当初は、弄れないように貞操帯を履かされていたのです。ですが、大きな問題を起こすこともなく、模範的な就労態度を貫いてきたので、夜間に自慰を行う自由が許されたのです。

(ご主人様には感謝しないといけませんね……)

触れ初めてすぐ、私のそこは、指先が濡れていることを感じられるほどに熱く濡れて来ました。

我ながらはしたなく恥ずかしいとは思いますが、こうして透明な人型に閉じ込められ、ことごとく自由を剥奪されているという事実が私を昂ぶらせるのです。

もしかすると、小さな空気穴から入り込んでくる甘い空気に何らかの成分が含まれているのかもしれない。

いずれにせよ気持ちよくなってしまるのが事実です。

「ん……っ、んんっ……」

じんわりと高まる快感に、思わず声が零れます。

とはいえ、口を開けられるわけではない上に私の身体で外気に触れているのは鼻の穴に当たる部分だけなので、声はほとんど外に漏れていないでしょう。

私と同じように待機させられているメイドたちも、耳は塞がっているはずですので、私の喘ぎ声を聞ける者は限られています。

そのため、気兼ねせず自分を慰めることに集中することができました。

朝っぱらから自慰するのはどうかと思われるかもしれませんが、自由に自慰ができるのはここに入っている間だけなので、割と切実なのです。

(んん……気持ちいい……)

動かせない身体が徐々に火照り出します。

こうなると外気が快適に保たれていても人型の内部はひどく暑くなって、自然と汗ばむようになりました。

目の部分はちゃんと曇り止めがなされていて、物理的に視界が曇ることはありませんでしたが、内側から沸き上がる快感によって視界が滲みます。

指先は自由とはいえ、逆に言えば指先しか動かせないのも、弄れる範囲にも限度があります。

このもどかしさがとてもいいのですが、絶頂に達することが中々出来ません。

透明な人型の中で身体を揺すり、少しでも刺激を増やそうと浅ましくも努力を続けます。

それでも懸命に刺激を続け、いよいよ、性的な高まりが絶頂の域に達しようとした、そのとき。

——ピ、ピ。ピ。ピ。ピ。——

耳の奥で甲高いアラームの音が鳴り響きました。

起床時間になったようです。この人型の中に入る前に、耳栓兼イヤホンを耳に入れており、それから音がしているのです。

私は慌てて秘部を弄っていた指を抜き、両手を合わせて待機状態に戻ります。指先が愛液で濡れているのを感じましたが、気にしてはいられません。

荒くなった呼吸を整えながらしばらく待っていると、目の前の廊下をご主人様が歩いて来ました。

その背後にはご主人様直属のメイド長が付いています。メイド長はご主人様と同年代の方で、同じ学校に通っている間に親交を深められ、卒業後屋敷で雇うことにしたのだとか。

ご主人様とはとても仲睦まじく、少々妬けてしまうほどには仲がよろしいようです。

そんなメイド長ですが、着ているメイド服は私たちが普段着ているものと同じでした。

裾の長いロングスカートに、フリルのついたエプロン。そしてメイド服の象徴とも言える、ヘッドドレス。

メイド長のエプロンは布製ですが、メイド服はラバー製であり、身体の首から下を余すこと無く覆っています。

私も毎日着ているからわかるのですが、ラバーメイド服はひとりひとりの体型に合わせて、ぴっちり密着するように作られており、胸の膨らみから手足の弛みまでを理想的なフォルムになるようにきっちり整えてくれています。

メイド服とは別にインナースーツがあり、それらが手足の先まで覆っているのですが、素肌が露出しているところはほとんどありません。ブーツは編み上げのもですが、膝の下まで届くもので、きっちり縛り上げているがゆえに履くにも脱ぐのにも多大な時間を必要とします。

そして——革製の首輪。ご主人様の所有物である証が首に巻き付いています。

首輪は飾りっ気のない、ペットに着けるようなシンプルなものなのですが、メイド長には特別にその首輪にネームプレートのようなものがかけられており、そこにはご主人様自らの手で「藍子」と書かれました。

それはご主人様からの寵愛の証であり、少し羨ましく思っています。

ご主人様とメイド長が私の前を通り過ぎて行きます。私はそれを目で追えるところまで追いましたが、視界の端に消えて行ってしまわれました。

それからほどなくして、再び耳に入れたイヤホンが起動する音がします。

『あー、みんな、おはよう。いまから今日のメンバーを発表するからよろしく』

少しのんびりとした、ご主人様の暖かい声が耳に染み込みます。

『選ばれた者は今日一日誠心誠意お仕えるように』

それに続いたメイド長の声は、ご主人様との対比もあって余計に冷たく聞こえました。

『今日は誰にしようかな……藍子は誰がいい？』

『緑郎様。ご自身でお決めください』

ご主人様の質問を、ぼっさり切り捨てるメイド長。

寵愛されているからこそその名前呼びと言動ですが、聞いていて冷や冷やしてしまいます。

ご主人様は「藍子はいつも通りクールだなあ」といって全く気にしていられっしやらないようです。

『そうだね……安定の一番・五番はいつも通り選ぶとして……ん？　なんか数値がいつもと違うのがあるね？』

私たちを閉じ込めているこの透明な人型は、私たちをただ閉じ込めているだけではなく、非常にハイテクな代物なのです。

内側に閉じ込めた人間のバイタルのチェックが出来て、何らかの不具合や体調不良などをすぐに感知することができるのだとか。

それが示している数値を見てご主人様は何か気づいたようです。

『藍子。どういうことだろ、これ？』

ご主人様は不具合が起きたり、体調不良者が出ていたりするのではないかと心配してくださっているようです。

ご主人様が指し示す数値をメイド長が確認するような間がありました。

『ああ、これは、どうやら少し早めに目覚めた者が自慰をしていたようです』

そう呆れ気味に彼女が指摘する声が聞こえ、私は心臓が跳ね上がるのを感じました。

私のことです。

『おー、なるほどねえ。……七番か』

(ああああ！　みんなに聞こえるところで言わないでくださいっ、ご主人様あ！)

ご主人様の咳きが私に聞こえているということは、当然他の皆にも聞こえているということです。

許可されている以上、禁止されているわけではないですし、同じようにしている人は他にもいるはずですが、

ですが、夜中にこっそり間食をしているのを見つけたのと同じくらいには恥ずかしいことでした。

『うん。じゃあ元気そうだし、彼女にも出してもらおうか。あとは適当に……』

ご主人様はそう意地悪くおっしゃいつつ、私を選んでくださったようです。

私を包んでいる透明な人型が前後に開き、封入されています。

た私の身体が解放されます。

長く脱力していた関係で、解放されてすぐは、まず身体の動かし方を思い出す必要がありました。今日はあらかじめ自慰をしていて、ある程度身体感覚を思い出ししていたこともあり、よろめくこともなく、人型から出ることが出来ました。

少し汗ばんだ裸の身体に直接外気があたり、身体が冷えて震えてしまいます。

それを表に出さないようにしつつ、私はご主人様とメイド長の近くに歩いて行きました。

ぺたり、ぺたりと裸足が床に触れ、音を立てます。

すでに解放されていた他のメイドたちが並んでいる列に私も加わり、待機の基本姿勢で待ちます。

他にも解放されている人たちが揃うのを待つ間に、軽く周囲を見渡します。

長い廊下、高い天井、格式ある造りの建物。

並べられた透明の人型に、その正面の壁にかけられたメイドたちの肖像画。

『封入回廊』とご主人様が呼ぶこの廊下は、私たちメイドたちの寝室でもありました。

今日働くメイドたちが並び揃った後にも、まだ透明の人型の中に残っているメイドたちがいます。

この館で働いているメイドたちは、確か全部で十五人はいるので、そのうち人型の外に出て働くのは六人だけとなっています。

残り九人はこの『封入回廊』を彩る調度品として居続けることになるのです。

ただ、外で働くメイドも、そうやって飾られるメイドも立場は同じ。上下の区別はありません。

この館では同じ仕事仲間です。

ですが、ご主人様を選ばれ、外で働けることの方が楽しいこともまた事実。

ゆえに、私たち選ばれたメイドたちは、優しい目で見つめてくださっているご主人様に向け、一斉に跪き、両手を揃えて頭を下げ、選んでいただいたことに対し、お礼の言葉を口にします。

「選んでくださり、ありがとうございます——なんなりとご命令ください。ご主人様」

六人のメイドたちが生まれたままの姿で、床に這い蹲ってご主人様に向かって挨拶をします。

それがこの館での朝礼のようなものでした。

真西院緑郎様に仕える私——メイド・犬山チトセの一日はこうして始まります。

第一章 メイドの身支度とお仕事

ご主人様への挨拶を終えた私たちは、さっそく行動を開始しました。裸のまま、屋敷内を移動します。

屋内とはいえ、全裸のまま歩くのは恥ずかしく、中々慣れないですが、仕方ありません。

解放された私たちメイドには、服を着る前にまずやらなければならぬことがあるためです。

メイドたるもの、やるべきことは頭に入っていますので言葉で確認することはありません。無駄話もしないように口を噤みながら、私たちはその部屋へと移動しました。

そこは、床がタイルになっており、壁際にいくつものシャワーヘッドが並んだ場所。

バスルーム、というには浴槽がありませんが、私たちの認識ではそこがバスルーム。

解放された私たちがまずしなければならぬことは、身体を洗うことなのです。

極まれにご主人様が洗ってくださいるときもありますが、大抵の場合は自分たちで洗うこととなります。

ご主人様に洗っていただけるときは広い浴槽のあるお風呂場を用品です。ですが、使用人だけの場合はこの透明な仕切りすらないバスルームで、シャワーを用品て手早く済ませることになります。

私たちはメイドなのですが、家畜になった気分です。

熱めのシャワーでざっと頭を洗い、身体を磨いて汗や垢を洗い落とします。

就寝時に閉じ込められる透明の人型は通気性がよいわけではないので、汗を大量にかいてしまうのです。

「ふう……急がなきゃ」

この洗う際、当然自分の身体に触れることになるのですが、あくまでも洗うことだけに集中します。

身体が自由だから自慰が出来る、などと考えるはいけません。時間も限られていますし、勝手な自慰は禁じられているためです。

もし職務中に我慢できずに自慰などしているのが見つかったら、大変厳しい罰則を受けることになります。

お恥ずかしい話ですが、私も屋敷に来たばかりの頃に、そのお叱りを受けたことがありました。

大抵のメイドは、一度は我慢できずに仕事中に自慰を行ってしまい、ご主人様の手によって躡けられるのが通過儀礼になっています。

また躡けられたくはありませんので、身体を洗うことだけに集中して急ぎ済ませました。

汗や垢を落とした後、私たちはひとりひとり順番に髪や身体に香油を塗りつけていきます。

強い匂いのするものではなく、どちらかというと手入れのための意味合いが強いものです。

この辺は仕えるご主人様の好み次第で変わります。私は

どちらかといえば匂いの強いものが苦手なので、匂いの弱いものを好んでくださるご主人様で、とても助かってます。私たちメイドに拒否権はありませんから。

皆でやっているのです、すぐに私の番になりました。

「よろしくお願いします」

挨拶もそこそこで切り上げ、複数の手が身体の隅々まで香油を塗ってきます。

この時には全身をまさぐられるわけで、正直に言えばかなり気持ちいいです。皆にそのつもりはないとわかっているのですが、乳房にすり込まれるために揉むような動きをしたり、脇腹やお尻など弱い部分を撫で回されたり、秘部や肛門にも触れられると、気持ちよくなならないわけがないのです。

「んっ……ふうっ……あ、んっ……」

感じてはいけなないとわかってはいるのですが、声をあげてしまいます。

それだけこの行為が気持ちいいというのもあるのですが、私たちメイドは身体をしっかりと開発されているので、感じざるを得ないのです。

そのことは皆わかっているのですが、声をあげても何も言わないのが暗黙のルールです。

恥ずかしいことに違いはありませんが、その暗黙のルールのおかげで少し救われています。

やがて全員の身体のメンテナンスが終わると、次は更衣

室に移動します。

これから私たちは与えられた制服——ラバーメイドスーツを着るのです。

二人一組になって、まずはアンダーラバースーツを身につけていきます。

さきほど身体に塗りつけた香油が潤滑油代わりになりますし、スーツには用意される段階で内側に潤滑油となるオイルがすり込まれているので、手伝いがあれば比較的スムーズに着ていくことができました。

まずは私がスーツに足を通していきます。

このラバースーツは足首から先がないので、ふくらはぎからびつちりと覆うように皺を伸ばしながら履いていきました。

服のサイズはメイドごとによりきっちり計って作られているため、ほどよい圧迫感と張りとを両立させることが出来ていました。

ラバースーツに両足を通し、手伝ってもらいながら腰までスーツを引き上げます。たるまないように引き延ばしながら履いたので、第二の皮膚が増えたような感覚です。

ちよつと身体を動かそうとすると、ラバー独特の感触でギュギュツ、と身体が締め付けられます。

びちびちとしたお尻が強調され、少し恥ずかしく感じま

した。

次にラバースーツの袖に腕を通します。背中側にチャックがあるので、さなぎから羽化するのを逆再生でやるように、身体が徐々にラバーに覆われていきました。

腕の方も手首から先は無いたイブなので、比較的楽に着ることが出来ます。ねじれないようにだけ気をつけて、腕をしつかり覆っていきます。

このあたりはご主人様のこだわりにもよるのですが、職務上素手になる必要があるときもありますので、とても合理的だと思います。

両足と両腕がしつかり覆われたら、パートナーにお願いして背中のチャックを引き上げてもらいます。

「ひやつ」

胸にラバーのひやつとした感覚が張り付いてきて、思わず身体を引いてしまいました。

「動かないでっ」

「ご、ごめんなさい」

手伝ってくれている彼女に怒られてしまいました。つい身体を動かしてしまったのは仕方ないとはいえ、いつものことですし、いい加減慣れなければなりませんね。

でもどうしても、あのラバーが身体の前面にぴたっと張り付いてくる時の感覚には慣れることができません。

胸の位置を調整しながら、首の後ろまでジッパーを引き上げてもらうと、私は手足の先と首から先を除いた身体を

すべてラバースーツに覆われます。

ラバースーツはぴたたりと私の身体に張り付き、第二の皮膚のように私の身体を覆ってくれていました。それだけではなく、理想的な体型になるように形を整えてくれるので、胸の形もまるでブラジャーをしているかのように自然な膨らみを作ってくれています。

これのおかげで、胸が垂れる心配をしなくていいというのは楽なものです。就寝時も、自分の体形に合わせた人型に詰められているので、平気ですし。

背中のジッパーがうなじの辺りまで引き上げられ、自分のアンダーラバースーツの装着が終わりました。

今度は手伝ってくれた彼女が同じものを着るのを手伝います。

淡々と順調にラバースーツを身につけて行っていました。が、ジッパーを引き上げる段階で私の時とは違い、かなりキツイ感じが始まりました。苦勞しながら、背中の真ん中あたりまでジッパーを引き上げます。

（もしかして太って……？ いえ、徹底した管理の中で、そんなことはないはず……もしかして……）

私は改めて彼女の胸を観察してみました。

するとやはり、彼女は苦しそうに胸の位置を調整するのに手間取っているようです。

「もしかして、胸が大きくなったのではありませんか？」

「う……まさか、そんな……っ」

彼女は恥ずかしそうに俯きましたが、私は羨ましく感じました。決して小さな方では無いと思っっている私ですが、この人のそれは明らかに巨乳を超えています。

ラバーズーツで抑えてなお、たわわな果実という表現が的確なほど揺れるのですから。ほどよく押さえ込めてしまえる私と比べるべくもありません。

ちよつと嫉妬してしまいます。

「成長期、ですか。羨ましいです」

意地悪な気持ちになって言ってみると、彼女は顔を真っ赤にしています。

「い、いや、そんなわけないから！ わかってて言ってるでしょ！」

意地悪で言ったのがバレてしまいました。まあ、一部の例外を除き、就職しているということは十八歳を超えているということですからね。

「はいはい。どちらにしても今日は仕方ないので、無理矢理あげますよー」

ラバーズーツの伸縮性を利用し、多少強引になりますが無理矢理ジッパーを引き上げていきます。かなり苦しくなるはずですが、今日は仕方ありません。報告をあげておけばサイズ調整されるでしょうし、一日の辛抱です。

「んっ、ぐうっ……！」

無理矢理詰め込んだ感満載の、パツツンパツツンのラバーズーツ姿の完成です。ちよつと敗北感を覚えてしまった

のも仕方ないと思います。

ちよつと手間取ったために周りから遅れていました。急ぎましょう。

次に手に取ったのは、重厚な革のブーツです。ただし、その内側はラバーで覆われており、履いた時の感触は限りなくラバーズーツのそれに近くなっています。

編み込み式の無骨なフォルムが魅力的でした。それを、まずは彼女に履かせてあげます。

「よし……行きますよ……！」

私は力を込めてブーツの編み込みを締めていきます。履くだけなら自分一人でも出来ますが、人に履かせてもらわないといけないのはこの強力な編み込みが原因です。

こうして膝下までびったり締め付けながら締め付けることで、ズレを無くし、ブーツと足の一体感を高める必要があるのです。この締め込みが緩いと、ブーツの中で足がズレるなど、かえって苦しいことになるので、力を込めてひとつひとつ編み込みを加えていきます。

両足にブーツを履かせる頃には、私はうっすら汗をいっていました。それくらい力が必要なのです。

交代した彼女にブーツを履かせてもらいます。編み込みが上にあがるにつれ、足が締め付けられて、文字通り身が引き締まる想いでした。

そうしてブーツを履いたら、次はいよいよメイド服本体を着ていきます。

「相変わらず、可愛いデザインのメイド服ですよね」

「家ごとに個性があつていいわよね……とにかく、急いで着なきゃ」

メイド服、といっても、もちろん普通のメイド服ではありません。

全体がラバーで出来た特別なメイド服です。

ご主人様のこだわりで、スカートはロングスカートの丈になっていて、かなり重いので、これも二人がかりで身につけます。

無理をすればひとりではできませんが、綺麗に着るためにはふたりで協力した方が早いのです。

長いロングスカートに、肩口がふんわりと広がった袖のデザイン。

一般的にイメージされる、メイドらしい姿に近づいて来ました。

さらにその上からフリルの付いた白いエプロンを身につければ、見た目だけは完全にメイドです。

ラバーで出来た手袋をはめれば、素肌が露出しているのは首から上だけになりました。

その首に、私たちの番号が記された革の首輪を巻き付け、南京錠で固定してしまいます。

鍵はご主人様が管理しているので、私たちにはどうしようもなく、ご主人様が外さない限り、私たちはラバースーツを脱げなくなつたのです。

最後にメイドの象徴たるホワイトプリムを身につければ身支度は完了です。

「よし、それじゃあ行きましようか！」

全身をラバーに包まれ、奇妙な安心感を覚えつつ、私はメイドとしての仕事を始めるのでした。

メイドの仕事は多岐に渡りますが、その得意分野によって主な担当というのが決まっています。

例えばさつき解放されたメイドの中では、五番のメイドはお料理が得意なため、ほぼ毎日解放されて仕事を行っているようです。

ピアノなどの楽器演奏が得意なメイドはそれを行つてご主人様を楽しませるのが役割ですし、解放されることが多いメイドは、それぞれ一芸に秀でている場合が多いです。

そういった特徴のあるメイドが多い中で、私はそういった特殊技能というべきものは持っていませんでした。

根が真面目なので丁寧な仕事を心がけてはいますが、他の人に代わることでできないものではありません。

ゆえに、今日みたいに解放される日ばかりではありませんでした。

解放されるのは大体三日に一日、くらいのペースでしょうか。

その分解放された今日は、精一杯仕事に打ち込みます。

今日私が請け負った仕事は、館の清掃作業。

ご主人様の自室や特別な役割を持つ部屋以外を除いた全体の掃除です。そういうところはメイド長が担当したり、特殊な技術が必要となったりする場所なので、私はあくまで一般的な掃除を行うだけです。

丁寧に、かつ迅速に掃除を済ませていきます。

掃除は好きな方ですし、毎日しっかりと掃除されているので、苦勞することも少ないので快適です。

順番に手早く清掃を済ませて行って、『封入回廊』の掃除も行います。

メイドたちが日々閉じ込められるものを掃除するわけですから、ここには掃除にも気合いが入ります。

私を含めた、今日解放されたメイドたちが入っていた透明な人型は開いたままになっており、掃除がしやすいようになっています。

そのひとつひとつを丁寧に拭いていきます。

(うーん、本当に精巧に出来ていますよね、これ)

透明な人型の中は、一人一人に合わせて作られているため、細かな凹凸の差がそのまま再現されています。型だけを見ても、どんな人がここに閉じ込められているのかある程度わかるくらいです。

人型の正面には個々のメイドの肖像画がかけられているので、中に誰も入っていないなくても、誰がその中に入っているのかはわかります。

絵では凛とした様子のメイドたちが、この中にいつも閉じ込められているのだと考えると、なんだか身体の奥にむず痒いものを感じます。

もちろん、自分のものを掃除する時はその感覚が余計に強くなって、思わず内股になって擦り合わせてしまったくらいでした。

これくらいなら、自慰には数えられません、ラバーに包まれた太もも同士が擦れ合い、なんとも言えない気持ちいい感触でした。

「ふう……ごめんなさい。勝手に気持ちよくなっちゃって……ちゃんと掃除しますね」

私は聞こえていないのは承知の上で、そう呟いて掃除に戻りました。

この場で掃除をしているのは私ひとりですが、独りではありません。

解放されるメイドは日によって違うので、当然解放されないメイドもいます。この『封入回廊』には、解放されないメイドたちがそのまま残っているのです。

透明な人型に閉じ込められたままのメイドたち。

指先までしっかりと固められて動けない彼女たち。

彼女たちを覆っている透明な人型を拭いているので、直接触るわけではありません。

ですが、透明な人型は非常に薄い素材なので、拭く際の刺激はダイレクトに伝わります。

私が綺麗にするために力を込めて拭いていると、透明な人型の中でメイドたちがぎゅっと目を瞑っているのが見えませんでした。

自分もやられたことがあるから当然わかるのですが、身体をミリも動かせない状態で与えられる刺激はとても激しいものです。自分の指以外の刺激で、とても気持ちよくなっていることでしょう。

それが自分の経験でわかっていますので、私は胸やお尻など、性感帯になり得る場所は少しだけ念入りに拭くようにしています。

それがかえって生殺しの辛い状態を生むことにもなりかねませんが、その辺は受取手次第なので、気にせず丁寧に磨き上げました。

中には外から見ても明らかに自慰に没頭しているメイドもいましたが、気にしないようにして拭く作業に集中します。恥ずかしながら私も解放されない日はそうしてしまう時がありますからね。

それでも明らかに火照っている感じがして、拭く手を通じて少し熱すら感じました。

そんな風に自慰に没頭できる彼女たちが、少しだけ羨ましく思えてしまいます。

(いけない、いけない……これ以上ここにいとこっちまで影響されちゃいますね)

すべての人型の掃除を終え、『封入回廊』から出ます。

次の掃除の場所に向かおうとしたら、ちょうど『封入回廊』から出たところでご主人様が一人のメイドに——さつき一緒にメイド服に着替えた巨乳の人です——『寵愛』を与えているところでした。

そのメイド服越しにもわかる膨らみが目を引いたのでしようか。

ご主人様は彼女に両腕を後ろに回し、胸を逸らせた状態で立たせ、膨らみをさらに強調させています。

その上で、彼女の背後に立ち、ラバーメイド服に包まれた彼女の乳袋を背後から両手でまさぐっておられました。

「ふあ……あんっ」

ご主人様の手で乳房を揉まれ、相当気持ちが良いのでしよう。彼女は身体を震わせ、思わずといった様子の喘ぎ声を出していました。

頬が上気し、胸だけで感じていることは明らかです。

私は一瞬それに魅入られかけ、慌てて頭を下げて仕事に戻ります。ご主人様が誰と何をしていても、他のメイドはそれを気にしてはいけません。受け持った仕事を行うだけです。

でも、その睦言の空気は漂ってきますし、メイドが感じている声をあげると、思わずこっちも快感を覚えてしまいます。

仕事に集中しようとしたのですが、どうしても気になって耳を澄ましてしまいます。

そうするとメイドの喘ぎ声やご主人様がメイドの胸を揉む音が際立ち、なにやら水音の混じったゴムの擦れる音も聞こえてきます。それがまたとてもエッチな音に聞こえるのです。

(うう……いいなあ……)

私も影響を受けざるを得ず、掃除のために手を動かすつも、つい両足を擦り合わせてしまいました。

もちろんそれだけではとても気持ちよくなるのに十分な刺激にはならず、もどかしさばかりが募ります。

それでもなんとか掃除に集中しようと苦心していると。

「ええと……七番。ちよつと」

ご主人様が苦笑交じりに声をかけてくださいました。

肩が勝手に跳ねてしまいます。恐る恐る、ご主人様に向き直りました。

ご主人様は優しげな、けれど少し呆れた顔をしていらっしやいました。

「ずいぶんと、こっちが気になるみたいだね……仕方ないなあ。おいで？」

どうやら、私にも『寵愛』をくださるようです。

羞恥と期待で、私のあそこがきゅつと反応してしまいました。

第二章 寵愛とお仕置きの違い

私たちは、ご主人様に絶対服従でなければなりません。それは例えどんな性癖や趣味を持つ方がご主人様になっても変わりません。そういう意味では、この家に仕える私たちは幸運な方だと言えるでしょう。

世の中には猟奇的な趣味趣向を好む方もいらっしやいますし、ラバーメイド服とは比較も出来ないほど、変態的な性質を好む方もいます。

雇われる前段階で選別は行われており、性癖の極端なミスマツチはないとされていますが、本当にそうなのかはわかりません。

ですが少なくとも私に関しては、ご主人様自体やその趣味趣向に関して、強い嫌悪感や忌避感はありません。

むしろラバーフェチに関しては私自身もその気があるので、毎日身に付けるラバーメイド服も含めて非常に好ましいと感じているくらいです。

メイド長のように親愛、とまではいきませんが、敬愛の感情は持てるご主人様に仕えることが出来て、ありがたいことです。

そんなご主人様が、近づいて傍に立った私に対して命令をくだしました。

「スカートの裾を持ち上げて、股間を見せて」

「承知、いたしました」

ご主人様こだわりの、分厚いラバーで出来たロングスカートを持ち上げます。

材質がラバーですのでかなり重く、両手を使わなければなりません。手もラバーに覆われていますので、滑ってスカートを手放してしまわないように、強く握る必要があります。

インナースーツでもある薄いラバースーツに覆われた股間が、ご主人様の視線に晒されます。

今日は下着も貞操帯も身に付けていませんので、さぞかしくつきりと股間の形が浮き上がっているのが見られていることでしょう。

ご主人様の眼が私のそこを見ています。

強い視線を感じて、思わず腰が引けてしまいそうになりますが、それをなんとか堪え、むしろ見やすいように股間を突き出すようにして立ち続けます。

同僚の乳房を触っていたご主人様は、その同僚の耳元になにやら囁き、同僚から離れてこちらに近づいてきます。

(何の指示を出して……? ……っ!)

彼女のが気になってそちらの様子を伺います。

ご主人様の手から離れた同僚は、なんとその場で自分の胸を揉み始めました。

「ふあ……んんっ、くう……あっ」

勝手に自慰を始めたわけではなく、恐らくご主人様にそうするように言われたのでしよう。

自分で触る分、どこをどう触れば気持ちよくなれるのか
わかってるのでしよう。迷い無い動きで、彼女は自身の
胸を弄っています。

その大きすぎる膨らみが、形を変えています。

「ん……んあ……はあ……ふっ……くう……あ……っ」

そんな同僚の喘ぎ声がBGMとして流れる中、ご主人様
は私の目の前にしゃがみ込みました。

スカートをめくっている私の前にしゃがみ込むのですか
ら、当然ですが、股間にご主人様の視線が至近距離から突
き刺さります。

「……っ」

視線の強さにむずむずするような感覚がして、私は身を
振りました。

その動きだけでも、私の身体を包むラバースーツは正確
に私の身体を締め付け、擦れて、全身に快感を生み出しま
す。

「ふあ……っ」

「ふうん……まだ僕は触れてもいないのに、かなり気持ち
よくなっているみたいだね」

わずかな変化を見られたのでしょうか。

その場所が濡れに濡れていることを、ご主人様は触るま
でもなく見抜いているようです。

「朝も、早くに目が覚めたからって自慰していたみたいだ
し、君ってほんとエロい子だね。見逃してたな」

そのご主人様の言葉に羞恥を覚えるも刹那。

「そのまま動かないでね」

ご主人様の指が、私のそこに触れてきました。

目の前のメイドは顔をリンゴのように赤くするほどの恥
ずかしさを堪えながらも、スカートをたくし上げて、薄い
ラバースーツに包まれた秘部を僕の前に晒している。

薄いラバーに覆われていて、隠されているはずなのに、
あるいは直接見えているよりも恥ずかしい思いをしている
に違いない。

少なくともそのぷっくりとした盛り上がりの形は、ハッ
キリと見て取れていた。

僕はその絶妙に『隠されつつ晒されている』という調整
に満足していた。メイド長と時間をかけて調整した甲斐が
あると言うものだ。

その過程で藍子が見せてくれた恥じらいや嫌がる表情は
思い出すだけでも僕を興奮させてくれるしね。

(あの時の藍子、ほんとうにエロ可愛かったなあ。また試
作品のあれを着て……おっといけない、まずは目の前のメ
イドに構ってあげなくちゃ)

うっかり意識が昔のメイド長との思い出に飛びそうになったのを意識して戻す。

「そのまま動かないでね」

スカートをたくし上げ続ける七番のメイドに呼びかけながら、僕はしゃがみ込んで高さを合わせた視線で、まっすぐ彼女の股間を凝視する。

視線をより強く感じたのか、七番のメイドは一瞬腰をひきかけたけど、すぐに、さっきより突き出すように腰を前に突き出した。

こちらがそこを見ていると言うことはわかっているだろうに、自分の恥ずかしさよりも僕の命令を優先しているわけだ。

彼女に限らずメイドたちはみんな忠実に僕の命令を守ろうとするところがいいらしい。

背後でもさっきまで成長したおっぱいをいじってあげていたメイドの一人が、「いいと言うまでおっぱいだけでオナニーしてて」という命令を忠実に守り続けている。

大きくなると感度が鈍くなる、なんていう俗説もあるけど、少なくともうちのメイドにそんな状態になっているメイドはひとりもない。

普段から使わせている、ラバースーツを着る際の潤滑油に、そのための薬が仕込んであるからだろうけど。

（もしかすると、彼女のおっぱいが大きくなったのも薬の影響かな……？ そんな効果があるとは聞いてないけど）

そうだとするのなら、薬の研究者にそのことを報告する必要がある。薬の効果を把握していないわけでもないけど、実際に使ってみるまでわからないこともあるだろう。

個人差もあるだろうし。

（もしメイドの体質によるものだとしたら……後ろのメイドはサンプルとして、研究所に送ることも考えないといけないな……）

うちからメイドがひとり失われることになるけど、世の中が発展するように協力するのは国民の義務だ。

そんなことを考えつつ、僕は目の前のメイドに意識を集めさせる。睦言を目撃したからとはいえ、仕事中に興奮するなんて、相当な好きものであることは間違いない。

厳しい罰を与える必要はないけど、ちよつとしたおしおきくらいはしてもいいだろう。

まずはどんな状態か確かめようと、その場所に軽く指を触れさせてみた。

薄いラバー越しに、柔らかい恥肉の感触がする。ぐにっと指先が肉に沈み込むような感じだった。

そして、その感触をかき消すほど濡れていて、熱く蒸れている感じがした。

潤滑油の影響だけではない、明らかに彼女自身が分泌した液の影響が出ている。

「うーん、こりゃあ、すごく濡れているねえ」
わざとらしく口に出して煽る。

「うう……ッ！」

七番のメイドは恥ずかしさのあまり唸った。

哀れで弱々しいそれが、こちらの嗜虐性をより刺激するのだということをおぼわかっていないのだろうか。

僕が摩るように指先を動かすと、彼女のそこはますます熱くなり、指から湿った感触が伝わってくる。

この場所に僕のを突き入れたらさぞかし気持ちがいいのだろう。その誘惑に負けてしまいそうになる。

その誘惑を振り払って、興奮しすぎないように注意しながら、僕はさらにその場所を弄り続ける。

彼女は体を震わせ、時に肩を跳ねさせ、与えられる快感に耐えていた。

別にイっちゃだめとは言っていないのだけど、何も言わないまま絶頂に達したら罰を与えようとは思っていた。

耐えることを選択したメイドの判断は間違っていない。(けれど、どこまで耐えられるかな……?)

意地悪な気分になって、さらに執拗に彼女のそこを責め立てる。

メイドたちに着せているインナー代わりのラバーズーツは、着るために開く背中以外、一切開くところがない。

人によっては弄りやすいように股間や胸のところを別でジッパーをつけていることもあるけど、僕的にはラバーズーツは極力開いていない方がいいと思って作っているからだ。その分、隙間や弛みにはかなり気をつけて作っている。

そのお陰で胸や股間やお尻に触った時の感覚はかなり気持ちいいのだけど、直接触ったり弄ったりするのが好きな人にとっては面倒な構造になっている。

「んあつ、はつ、ああつ」

無心に弄っていたら、感度が高まるところまで高まったようだ。声が抑えられなくなっているし、膝も震え始めている。

あと一息で絶頂を迎えることだろう。

「い、イクツ……いっちゃい、ますつ……！」

それでも、無断で行くことはなく、ちゃんと宣言することとは出来た辺り、優秀なメイドだ。

彼女の腰が彼女の意思とは明らかに違うところで動き、身体が跳ねて首を仰げ反らせ、絶頂しようとした。

ちゃんと教育が行き届いていることに満足して、僕は――彼女のそこから指を離す。

弄られ続けて、高まり続ける快感。ご主人様に指で弄られただけで、私は容易く限界に近づきます。

「い、イクツ、いっちゃい、ますつ」

真っ白になりそうになる快感を堪えながらも、なんとか絶頂する前に宣言することができました。

絶頂を禁じられている時に絶頂してしまうのは論外だとしても、基本的には許可を得られるまでは絶頂しないようにするのがこの館でのルールです。

しかし、ご主人様に弄られた結果、絶頂しそうになってしまった場合は、ちゃんとイくことを宣言してから絶頂するように躡けられていました。

ルールさえ守っていれば、理不尽な罰則や躡けを行われる心配はありません。

それは逆に言えば、ルールを破った時は容赦されないということなのですが。

ともあれ、私は絶頂に達する前に宣言し、そのまま気持ちよく絶頂してしまおうとしました。

その直前でご主人様の指が離れなければ。

刺激によって絶頂しかけていた私の身体は、急に刺激がやんだことで達することが出来ず、くすぶる火種だけを残して快感が引いていきます。

「——ええ……？」

あまりな仕打ちに、思わず変な声が出てしまいました。

それを聞かれてしまったのか、ご主人様は楽しげに笑っていらつしやいます。

「ふふ……ダメだよ。これは仕事中心気持ちよくなっていた君に対する『おしおき』なんだから」

明言はされていませんでしたが、どうやら『寵愛』ではなく『おしおき』だったようです。

勘違いしていたことに、顔から火が出るほど恥ずかしい思いでした。

「気持ちよく絶頂させてはあげないよ」

ご主人様はそう言いつつ、胸ポケットから端末を取り出します。

「そのまま動いちゃダメだからね」

そして、いまだ身体の疼く私をその場に残し、背を向けて端末を使いながら部屋から出て行ってしまいました。

あとには胸を弄って気持ちよくなり続けている同僚と、スカートを手を捲り上げたまま、じわじわ燻る快感を抱えて立ち尽くす私だけが残されていました。

せめてスカートをおろしたいのですが、動かないように言われたため、そうすることも出来ません。

勝手に下ろしてしまったら、軽い『おしおき』では済まなくなるでしょう。

それは自慰を命じられた彼女も同じです。

ご主人様がいなくなったあとも、執拗に自分の胸を弄り続けています。彼女は私と違って絶頂を禁じられていないのか、時折背筋をぴんと伸ばして、仰け反って絶頂しているのがわかりました。

それは羨ましいことではありましたが、過ぎた絶頂は相当に辛いものです。

あまりに短時間のうちに絶頂しすぎた彼女の膝が笑い始めていました。いまにも倒れそうになりながらも、命令に従って胸を弄る手は止まりません。

「はあ……はあ……あう……ああ……うあ……っ」

もはや声を堪える余裕もないのか、だらしなく口から息を吐き出し、よだれを垂らしながら彼女は自慰を続けていきます。

そうなつてもなお、愚直に命令を貫こうとする姿勢は、素直に賞賛に値する忠誠心でした。

彼女の痴態に見入っている間に、この部屋に他のメイドたちが通りかかってきました。そのメイドたちは一心不乱に自慰を続ける彼女や、スカートをまくり上げたまま動かない私を見て、一瞬ぎよつとした様子で動きを止めます。
(うう……見ないでください……)

そう思うものの、はしたなく興奮しているであろうそこを晒したまま動けません。

メイドたちはすぐに私や彼女の奇行が、ご主人様の命令によつて行っていることだと察し、申し訳なさそうにしなから、顔を赤くしてそそくさと去って行きます。

晒し者にされているようで、惨めでした。スカートを持ち上げている手も、限界が近いのかぶるぶると震えて来てしまいます。

ご主人様はまだ戻ってこれられないのでしょうか。

もしや、私たちのことを忘れてしまったのでは、と不安

になるくらい時間が経つ頃によく戻ってきてくださいました。

「ごめんごめん。お待たせ。ちよつと準備に手間取った」

軽く謝罪をしながら部屋に戻ってきたご主人様は、メイド長を伴っていらつしやいました。

メイド長はあまり表情を変えずに、影のようにご主人様の後ろについています。

まず、ご主人様はふらふらになりながらもまだ自慰を続けている同僚の方を見ました。

彼女に命令を出していたのを忘れていたのか、ご主人様は少し驚いていたようにも見えました。

「あー……君はもうやめていいよ」

ようやく中断の許可がもらえた彼女は、ほつとしたように手を胸から離し、そのまま膝から崩れ落ちるように地面に突っ伏しました。

頭を打ちほしなかと心配でしたが、それよりも床に突っ伏した表紙に、胸が床に擦れてしまった方が打撃だったらしく、びくんっ、と身体を跳ねさせて悶えていました。

陸に打ち上げられた魚のようで哀れです。

そんな彼女を、ご主人様は頭を掻きながら見下ろしていました。

「あちゃあ……ちよつとやらせすぎたか。仕方ない。どうせ、あそこに送ることに決まったんだし……藍子。その子連れれてって」

指示を出されたメイド長は、ご主人様に持っていた袋を渡します。

「承知いたしました——立ちなさい」

メイド長が同僚の側に近づいて、足腰が立たなくなっている彼女に肩を貸して連れて行ってしまいました。

そこに送る、という言葉が聞こえましたが、彼女はいたいどうなるのでしょうか。

そんな風に不安に思っただけ彼女を見送りましたが、彼女に同情している場合ではありませんでした。

「待たせて悪かったね。これを取りに行っていたから」

そういってご主人様がメイド長から受け取っていた袋に手を入れ、中から『それ』を取り出します。

取り出されたものは、かつて学生時代に着用していたものに似た——貞操帯でした。

鈍色の金属がずっしりと重く、存在を示しています。

「あれだけ焦らしたから、触りたくなっているでしょ？だから、今日一日はこれで封じちゃおうと思っただけ」

ご主人様は屈託のない笑顔で、そう宣言したのでした。

第三章 貞操帯でメイドを管理する

くちゆり、くちゆりと。

私の秘部は、ご主人様の指が私のその入口を突く度に、はしたない音を立てていました。

刺激によつてすっかり発情し、もしご主人様のものを入れていただければ、それだけで絶頂に達してしまうほどに昂ぶっていることがはつきりわかります。

そんな状態のそこをご主人様は、貞操帯で誰にも触れないように封じてしまおうとしていました。

「ご、ご主人さまあ……っ」

どうか、それを着ける前に、一度でも逝かせてはくれないかと。明確に要求を口にするのは、はしたないことだと教え込まれているので、声音で求めるしかありません。

私の懇願する声はさぞかし情けないものに聞こえていたと思います。

ご主人様が具合を確かめている指に擦りつけるように、すり寄せるように、腰を動かしてしまいました。

けれど、ご主人様の指はあっさりとその場所から離れてしまいます。

「だめだよ。我慢しなさい」

そして無情にも、そんな命令を下してしまわれるのです。そう言われてしまうと、一般メイドの私にはどうすることもできません。

「着けづらいから、メイド服のスカートをもつと……胸のところまでたくし上げなさい」

言われるまま、従うしかないので。

私はご主人様が貞操帯を着けやすいよう、メイド服のロングスカートを腰の後ろの方までまとめながら、胸のあたりまでたくし上げます。

「両足を肩幅より開いて」

端からみてどんな格好になっているか、想像したくありませんが、さぞかし無様な格好をしていることでしょう。

私は羞恥心を堪えて両足を開きました。

ぴちぴちのラバースーツに包まれた私の下半身が、ご主人様の目の前に晒されているはずで。

「うん、いいね。エロくて可愛いよ」

そつと、ご主人様の手が、ラバースーツに包まれた私のお腹からお尻を撫でて来ます。

ラバーの上をご主人様の手が移動していく感触が、とても気持ちよく感じられました。

言葉でも褒められて、さらに嬉しいのですが、その刺激や言葉だけでイけるようには躡けられていません。

かえって生殺しになってしまい、苦しくなるのがわかります。

「それじゃあ、貞操帯を着けるよ」

金属で出来たパンツ、と表現できるそれは、足を穴に通す必要はないように出来ていました。

左右のロックが外れ、まるで布団を挟む洗濯ばさみのように股の中央部分からばかりと開き、私の股を挟み込むように抑え込んで来ます。

「くう……っ！」

いまだ刺激を求めて震える私のそこは、無情にも金属の枷が覆い、左右の部分がロックされ、あっさりと封じられてしまします。

もはや、私が両手を使って弄ろうとしても、金属に覆われたその場所に触れることは出来ません。もやもやとしたものだけが残り、足が震えます。

そして、その貞操帯は単に物理的な接触を封じるだけでは終わりませんでした。

貞操帯の内側、私の身体に触れている部分は、絶妙な形にカーブを描いています。

ラバースーツがそこを覆っている以上、私のそこにはいかなるものも入り込むことは出来ません。

だから、張り子などの仕掛けはその貞操帯には取りつけられていませんでした。

ですが、代わりに微妙な凹凸が私のそこを捉えています。それらは、触れている場所に絶妙な刺激を与えるように作られています。

「ん、く、あ……っ！」

ちよつと身体を振ると、それだけで触れている部分の感覚が変化します。思わず肩が跳ねてしまうほどの強い感覚。けれど、決して絶頂に達することはできない、絶妙な刺激でした。悶々とした快感が腰を中心にじんわりと広がり、私の脳を痺れさせます。

「もうスカートを下ろしてもいいよ」

そういうご主人様の声に従い、裾の長いロングスカートを下ろします。バサリと、重い感触をさせながら、ロングスカートは私の下半身を覆い、外目からは何の問題もないラバーメイド服を着た姿を作り出します。

けれどもその分厚いロングスカートの内側では、全く普通の状態では無い私のあそこが封じられています。

（うう……っ、っ、辛い……っ！）

いますぐ何かをあそこに入れて、かき回して欲しい衝動に駆られます。

それを成すことが出来るのはご主人様だけなので、私はご主人様に向けて哀願する視線を送りました。

まっすぐ見つめて見ると、ご主人様は少しだけ反応したように見えました。ゆっくりと首を横に振ります。

「うん、そんな目で見られると、ついやってあげたくなくなるけど……無理なんだ」

「え……」

ご主人様は非情な事実を口にします。

「だって、鍵による封入じゃなくて、時間制だもの」

それはつまり、私たちメイドの身体を自由に出来、いかせるもいかせないも自在なご主人様でさえ、時間が来るまでは私のその場所を弄ることが出来ないということ。

私の疼きは決して解消されないことを知らされたのです。思わず足から力が抜け、その場にへたり込んでしまいました。お尻が床に触れ、貞操帯に包まれたあそこが突き上げられます。

「ひぐつ……つ、あつ、ああ……つ」

思わず声をあげてしまいました。

突き上げられた——それほどの衝撃があつたにも関わらず、貞操帯はその役目をきちんと果たし、絶頂に至れるほどの衝撃をそこに与えてくれなかったのです。

ご主人様は私のそんな姿を見て、少し困ったように、けれどもそれ以上に楽しげに、笑っていらっしやいました。

「へえ……いまでもいけなかったのか。さすがは最新式の貞操帯。完璧だね」

「ご、ごしゅじんさまあ……」

「だから、僕にももうどうしようもできないんだってば。……そうだね、今日の夜までお仕事頑張ったら、特別に僕の部屋でメイド長と一緒に遊んであげるから」

普段、夜のお楽しみは、メイド長だけが呼ばれています。たまにメイドの何人かが手伝いにいたり、一緒に楽しんだりしていたようですが、私はまだ呼ばれたことはありませんでした。

そこに混ぜてもらえるという希望がほのかに私の心に灯ります。

「ただし！ 我慢できずにおっぱいでオナニーしたり、仕事でミスしたりしたら『懲罰』に切り替えるからね」

容赦の無いご主人様の言葉に、身が引き締まる想いがしました。

そう、下半身に貞操帯で覆われてしまいました。私の胸は自由なままです。ラバーズスーツ越しにでも、十分な刺激を与えることはできるでしょう。私たちは毎日ラバーズを着て、肌の感度を高めていますから、胸だけで逝くこともできるかもしれません。

それを思い出してしまったことで、下半身だけに集中していた意識が上半身にも割かれることになって、乳首がラバーズスーツの内側に擦れる感触さえ感じられるようになってしまいました。

「はう……つ」

触りたい。触りたい。触りたい。

その悪魔の誘惑を、必死になつて堪えます。少しでも触つてしまつたら、もう我慢が出来なくなつて、触り続けてしまうことでしょう。触れさえすれば気持ちよくなれるとわかってはいる分、こちらの誘惑の方が危険でした。

「ご、ご主人様……その、む、胸の拘束具は着けられないの、ですか……？」

いっそご主人様の手で封じてくださつた方が、気が楽に

なります。

その思いを込めてご主人様に提案してみたのですが、ご主人様は楽しそうに笑うだけでした。

その手が、ゆっくりと私の胸に伸びてきて。

「ご、ご主人さまっ、まって——ひぎい！」

容赦なく、ラバースーツ越しであったのに実に正確に、私の乳首がひねり上げられました。敏感になって、まさに意識を向けていただけに、凄まじい衝撃でした。

激しい痛みが、私の身体を突き抜けていきます。目の前に星が瞬いたような気さえました。へたり込んでいて助かりました。

もし立っていたら、衝撃のあまり座り込んでしまったでしょうし、いまの状態でさっきのような突き上げる衝撃を受けていたら、大変なことになっていたはずですが、それを幸運だと思えることはできませんでした。

ご主人様は私の乳首からすぐに手を離してくださいましたが、じんじんとした痛みが残っていて、それが刺激となつて乳首が硬くなつてしまつてることがわかります。

「あうう……っ、くう……っ」

身を振るたび、ラバースーツが微妙に擦れ、ぴりぴりとした感覚を生じさせてきました。触りたい、その欲求を的確に引き出していきます。

「ふふふ……辛そうだね。まあ、がんばって耐えてよ。ほらほら、立って！」

ご主人様に促され、私はなんとか立ち上がりました。

与えられた数々の刺激のために、まともに立つことは難しかったのですが、なんとかふらつきながらも立つことは出来ました。

「よし、それじゃあ一日仕事頑張つてね！」

ぱしん、とご主人様にお尻を叩かれました。

「ひやあっ！」

思わず悲鳴が出てしまいましたが、軽くだったのでなんとか堪えられました。

ご主人様は楽しげに歩き去ってしまい、私はその場にひとり取り残されます。

疼く身体がどうしようもなく悶々としていましたが、意を決し、仕事に戻ることになりました。

仕事に集中していれば、きっとこの身体の疼きも収まると思つたからです。

収まるはずがありませんでした。

もちろん仕事に集中していましたが、ミスをしたし、心に細心の注意は払っていましたが、私の開発された身体は、それでもなお快感を生み出していました。

「はあー……はあー……はあー……」

調度品をごしごしと磨くその腕の動きにさえ、私の身体はぴくぴくと反応してしまいます。腕を伸ばし、縮め、下

ろし、上げ、というそのわずかな動きにラバースーツが引
つ張られ、ぴんと立った乳首が刺激されます。

さらに、股間には相変わらぬ貞操帯による刺激が絶え間
なく襲いかかって来ていました。身体を動かせば動かすほ
ど、その部分の刺激は高まり、けれど決して絶頂には達し
ないとここで止まります。

もう何度手を自分の胸にやろうとしたかわかりません。
そのたびに拳を痛いほど握りしめることで気を紛らわせ、
深く息を吸って吐いてすることで耐えました。

でも、もういつ我慢が出来なくなってもおかしくない状
態です。

私はふらふらになりながらも、なんとか午前中の仕事を
終えました。嫌な汗がラバースーツの中に充満して、喉が
からからです。

(お昼……いかなきゃ……)

メイドたちはメイド専用の食堂で食事を取ります。

ふらふらしながらそこにやって来た私を、メイドの同僚
達は目だけで追いかけています。

どうして私がふらふらしているかなど、彼女たちにはよ
くわかつているからです。

普段、私もたまにふらふらしながら入って来るメイド
を見て、同じように考えているからわかります。

どんな形であれ、ご主人様に弄ばれてふらふらになって
いるというのは、自明の理です。

そういうメイドに対しては、下手に触れないのが暗黙の
マナー。弄ばれ方によっては、触れてしまうことで余計に
辛い思いをさせることにもなりかねないためです。

私は気を紛らわせるためにも、ご飯を食べようと食事当
番のメイドに注文しようとして。

「あ。七番さん。あなたは今日はご主人様の部屋に行って
……『特別メニュー』を食べなさいって」

食事に逃げることにすら、許されませんでした。

ご主人様の部屋は屋敷の中で最上階に位置していました。
そこでご主人様はいつもお仕事をなさっています。

絢爛豪華な螺旋の階段を上り、部屋にたどり着くと、軽
く扉をノックします。

「どうぞー。入ってー」

軽い調子で入室の許可が出されたので、私は「失礼いた
します」と声をかけながら扉を開けて中に入りました。

部屋の中では、ご主人様の他に、常に側にいるメイド長、
そして肉体労働担当の男性職員がふたり立っていました。

ご主人様は、いつも部屋の奥の執務机に座っていました。
やるのですが、今日はそこではなく、部屋の中心に作られ

た広いスペースの中に立っていらつしやいました。

ご主人様の足下には、小さな木箱がひとつあり、ご主人
様はそれを楽しげに見ていらつしやいました。

小さい箱とは言いましたが、一抱えほどはあり、重さもよりますが女性一人で運ぶのは難しいサイズでした。

その箱の蓋を、ご主人様は釘で打ち付け、完全に塞いでしまっています。

「よし、オッケー。それじゃあ持っていてくれるかな？」

ご主人様がそう呼びかけると、二人の男性職員が言葉もなく動き、二人がかりでその木箱を運んで出て行ってしまいました。荷物運びを専門にしている男性が、二人がかりで運ぶとなれば相当重いのでしょう。

通り過ぎる瞬間、何か変な声のようなものが箱から聞こえたような気もしましたが——それに気を取られている余裕はありませんでした。

「どくん、どくんと心臓が鳴っているのがわかります。

「ん？ 何したの？ 早くこっちに来て」

ご主人様は入り口付近で立ち尽くしていた私を、何気ない調子で呼び寄せます。

私は緊張で乾いた喉に唾液を落とし込みつつ、ご主人様の側に歩み寄りました。

「ほい、藍子。準備よろしく」

「はい——跪きなさい」

ぽん、と肩を叩かれ、私はその場に膝を突きました。

その両足をまとめるように、メイド長が太いベルトを太ももに食い込ませて縛ってきます。

「腕を後ろに回しなさい」

命じられるがまま、従うと手首に太い革のベルトが巻かれ、手枷同士が連結されて、手が動かせなくなり、肘のあたりでも、肘と肘がひつつくほどにベルトで縛られ、いよいよ自由が利かなくなってきました。

「口を開きなさい」

おぞおぞと開けた口にねじ込まれるように、丸い円筒状のものが入ってきます。それは開口具の一種のようで、私の口は開いたまま閉じられなくなりました。

(うう……何もできない……)

最後に目隠しを被せられ、眼すら見えなくされてしまいます。

跪いて両腕を後ろで縛られ、開口具で口を開いたまま閉じられない状態で視界も奪われ、何も出来ない、見えない状態にさせられてしまいました。

さらにおまけの耳栓が耳に押し込まれます。

(こ、ここまでするんですか……?)

私は真つ暗闇の中、ご主人様かメイド長に何かをされるのをじっと待つだけの存在となりました。

どくん、どくんと心臓の鼓動が静寂の中、響きます。

第四章 メイド長特製ブレンドドリンク

緑郎様の部屋の中心に、ラバーメイドスーツを着た七番のメイドが跪いている。

ご主人様である緑郎様の趣味を反映させたメイド服は、そのほとんどがラバー素材で出来ており、その女性らしい体つきを性的に強調している。

さつきの子と違い、この子の場合には胸のサイズは平均的だから、服の上からだと同程度に大きいという感じはしないのだけど、ラバー素材による強調が良く利いている。

そんな彼女は、現在足を揃えた状態で縛られ、膝立ちの状態になり、その両腕は後ろに回した状態で手首と肘のあたりを引き絞られ、その口を円形の開口具で無理矢理開かされ、分厚い目隠しで視界を奪われ、耳栓をはめて聴覚も奪われた状態で、そこにあつた。

ひとつの置物であるかのように、その体勢を保とうとじつとしている。

メイドはご主人様の命令は絶対。待てと言われればどんなに苦しい体勢でも維持して、そのまま待たなければならぬ。

膝立ちの状態のその体勢はそこまで厳しいものではないはずだけど、口が開いた状態で前を向いているため、口枷の間からどろりとよだれがこぼれ出して来た。口枷の奥で赤い舌が艶めかしく蠢くのが見える。

よだれが垂れ、彼女の胸元に落ちる。それでも、彼女はじつと待っている体勢を崩さない。

メイドの基本ではあるけど、きちんとそれを理解して、例えよだれが際限なくこぼれ落ちようとも我慢できているのはそれなりに評価できた。

「こういう人間家具、悪くなさそうだよ。よだれがこぼしおどしてみたいなものの中に溜まっていつてさ。一定の量が溜まったら仕掛けが動いて気持ちよくなれる、とか。今後人間家具職人さんに提案してみようか」

緑郎様は最近人間家具にも興味を持っている。

その提案自体はとても素晴らしい提案だと思うのだけど、このまま彼女をここに放置しておくのは喜ばしいことではない。

「良いお考えかと思いますが、とりあえずは七番に『特別メニュー』をお与えになつては？」

そう指摘すると緑郎様も彼女をここに呼んだそもその理由を思い出したようだ。

「おっと、そうだった、そうだった。それじゃあ藍子も準備して」

良いながら、緑郎様は身に付けていたズボンとその下のボクサーパンツを脱ぎ始める。露わになる緑郎様のたくましいものに目を奪われつつ、自分もまた準備を始めた。

ラバーメイド服を捲り上げ、その下にある私特製のインナーラバースーツを露わにする。

普通のラバーメイドたちのインナーラバースーツは全部が一体型であり、脱ぐためには固定している首輪を外してラバーメイド服を脱ぎ、インナーラバースーツの背にあるジッパーを下ろして……という順序を踏む必要があるが、私のものは特別な仕掛けが施してあった。

私の乳房を覆う部分のラバースーツ。

その部分を手で覆うようにして握り、少し力を込めて捻ると、乳房を覆っている部分のラバー部分が分離し、穴が空いてしまう仕様になっているのだ。

つまり、乳房を覆っていた部分のラバーがなくなり、私の乳房がむき出しになって。

スーツの穴から、根元を絞られた乳房が飛び出した。

それは例えるなら、熟れた果実がたわわに実って木の枝で揺れているようなものだった。

ふるふると柔らかさうに揺れるそれがあまりにも柔らかさうで、僕は思わずそれをふたつとも驚掴みにしていた。

「あっ、いけません、緑郎、様あ……っ！」

途端に、それまでクールで平静だった藍子が顔を快感に歪めてその身を振る。藍子の身体は普通のメイドよりも遙

かに時間と手間をかけて調整してある。日常生活に支障はないけども、そのつもりでちょっと触れるだけで、ものすごく感じてしまうようになっていたのだ。

現にいまも、少しおっぱいに触れて揉んだだけで、藍子は絶頂寸前のような表情をして、身もだえている。

僕のペニスはその藍子の蕩けた反応を見るだけで、むくむくと起き上がってしまった。

我ながらちよつと興奮するのが早いかなとは思ったけど、実際彼女の身体が魅力的なのだから仕方ない。

そのままいっそ藍子との文字通りの乳繰り合いに移行しようかと思っただけ、今回の目的はそれじゃない。我慢していったん彼女の乳房から手を離れた。

「ごめんごめん。まずはこの子の食事を済ませないとね」僕は藍子にそう言って、お椀状の機械を持ってきた。

それはちよつと藍子の胸のサイズに調整されたもので、底の部分に管が繋がっている。

その御椀はふたつあった。わかる人にはいまの説明だけで何かわかっただろう。

そう、搾乳機だ。

牛の搾乳機はもつと細長い筒のようなものだけど、これは人間に合わせて作られたものだから、乳房に被せる部分はお椀状になっている。

それをむき出しになっている藍子の左右のおっぱいに被せるようにして装着した。

被せるとお椀部分の機械が動き出し、ぴったりと藍子の
おっぱいに張り付いて止まる。

こうなったら僕が手を離してももうお椀は藍子のおっぱいから外れない。椀の重みと管に引つ張られて、藍子の乳房が若干下を向くけど、全体にぴったり張り付いているから、見た目ほど痛くはないはずだった。

「んっ、く……あ……う……」

それでも刺激が強いことに変わりは無く、藍子はあげそうになる喘ぎ声を必死に堪えていた。

我慢する藍子はともエロくて可愛かったけど、あまりこの状態を長く続けているのも可哀想だ、僕は少し急いでお椀から伸びる管が繋がっている機械の元に走る。

「よし、藍子。いくよ」

藍子の反応は待たなかった。

「ふあっ——ああああっ！！」

機械のスイッチを押すと、藍子が悲鳴のような声を上げ、その場に膝を突く。

機械が動き出して、藍子の乳房の中にある母乳を搾り取り始めたのだ。

ちなみに、藍子は妊娠しているわけじゃない。普通は妊娠しないと出ないはずの母乳が出るのは、藍子の身体がそのために作り替えられているからだ。特殊な薬品の効果な

のだけど、明らかに必要以上の母乳を作らせることの出来る薬品の力に感服する。その上で無害なのだから。

「うあっ、ああっ、ひゃうっ、くあ……っ！」

白い液体が管の中を通って機械の中に吸い込まれていく。管が細いとはいえ、すごい量だ。身体を一切弄っていない男性が一度にする射精の数十倍の量が吸い出されている。

しかも藍子は改造によって母乳が乳首を通過する際、男性の射精と同等以上の快感を覚えるようになっていた。それだけの母乳が絞り出されれば、恐らくは脳が焼き切れそうなほどの快感を生み出しているはずだった。

あまりに快感に腰砕けになり、床にへたり込んでいる藍子の前に、僕は立つ。

「藍子、自分だけ楽しんでないで——僕も気持ちよくさせてよ」

搾乳される快感に乱れる藍子の様子を見て、僕のペニスは痛いくらいに勃起していた。

目の前に突き出されたそれを、藍子の快感に蕩けた目が見つめる。

胸で爆発が起きたのかと思う刺激だった。

お椀状の器具の中で、私の乳房が縦横無尽にもみほぐされる。

乳房に被さっているお椀状の器具には、乳房を刺激し、母乳を出すように促す機能がそなわっていた。それによって生み出される快感は信じられないほど強いもので、目の前が真っ白になりそうなほど、凄まじいものだった。

「うあつ、ああつ、ひやうつ、くあ……っ！」

立っていられず、へたり込んでしまっても、機械は動きを止めてはくれない。少しでも多くの母乳を絞り取ろうと、乳房に刺激を与え続けてくる。

私がこの機械から逃れられる手段はひとつだけ。緑郎様が、私のご主人様が、機械を止めてくれることだけ。

それまで延々と母乳を絞られ続けなければならぬ。

かつて緑郎様は別のメイドでこの搾乳機の実験を行ったことがある。メイドが限界を迎えるまで、何時間も機械を作動させたままにしたのだ。

結果として、薬によって際限なく母乳を生み出し続け、機械によって絞られ続けたそのメイドは、三時間後、とんでもなくやせ細った状態で気絶し、病院に搬送され、あわや死亡事故になりかける騒ぎになった。

それでも母乳の生成は終わらなかつたというのだから、薬と機械の効果は恐ろしい。

最終的に十リットルもの母乳が絞られたのだというのだから驚きだ。

人間の体のほとんどは水で出来ているというけれど、それはあくまで成分的な話であって、普通は十リットルの液体が取り出せることはない。

体の脂肪やら血液やらを母乳に変換しているというけれど、ほんの短時間でガリガリに痩せこけたメイドの姿にはさすがに恐怖を覚えたものだ。

今回は耐久実験ではないから、そこまでされることはないとわかっていても、絞り取られ続ける快感と、それに伴う恐怖は大きい。

早く緑郎様を満足させて、機械を止めてもらわなければならぬ。

快感の嵐の中で霞む視界に、緑郎様の姿が映った。

「藍子、自分だけ楽しんでないで——僕も気持ちよくさせてよ」

たくましい緑郎様のペニスが、私の顔の目の前にそそり立つ。緑郎様のそれは、ともすれば優男にも見える緑郎様の全体の容姿とはかけ離れた、逞しさとグロテスクさを併せ持つ怪物だった。

良く男性器はバナナに例えられることがあるけど、緑郎様のそれはまさにそのサイズだ。太く、長く、そして堅い。シンプルに恐ろしく、雄々しい代物だ。

私は愛しい人のそれを見つめるだけで、口の中が涎で濡れてしまう。はしたないことは自覚しつつ、私は口を大きく開いて緑郎様のペニスを口の中に導いた。

熱いほどに滾っている血潮を、口内一杯に感じる。喉の奥へ先端を受け入れ、喉で緑郎様の先端を刺激した。

「うお……っ、さす、が、藍子……っ、めっちゃ気持ちいい……っ！」

緑郎様が腰を突き出しつつ、そう褒めてくれた。

褒め言葉に気分を良くしつつ、さらに喉の奥にそれを受け入れる。

同時に、舌を使って全体に刺激を与えていく。

ビクンビクン、と射精を堪えているのか、緑郎様のペニスが暴れた。喉の奥を突かれ、反射的に嘔吐きそうになるのを気合いの力で抑え込み、さらに刺激を与えていく。

緑郎様は激しく唸り、堪えているようだった。

ますます出してくれてもいいのだけど、もっと気持ちよくなりたいということなのだろう。

私はより強く快感を覚えてもらおうべく、ラバー手袋に覆われた手で、緑郎様の睾丸を左右ひとつずつ手のひらで包んだ。

「はう……あっ！」

さわさわと触れるか触れないかの刺激を睾丸に与えつつ、さらに喉の奥でペニスの先端を擦った。

これにはさすがの緑郎様も思わず背を仰け反らせ、全身で耐えなければならなかった。

私の技で、ちゃんと相応の快感を与えられているのだと嬉しくなる。

口の中どころか、喉の奥までペニスが入って来ていて、息苦しかったけど、気にせずさらに奉仕を続けた。

もっと攻めて射精を促そうとした時、私の母乳を絞り続けている機械が急に動きを変えた。

いままでは単調に乳房を揉んでは吸い取る、というだけの動きだったのが、突如震えだした。

乳首を正確にシェイクされ、いままでの感覚とは全く違う、鋭い快感が胸を通じて頭を貫く。

「ンン——ッ!?」

思わず全身を震わせて悶えてしまう。そのため、緑郎様に対する攻勢が緩んでしまった。

その一瞬の隙について余裕を取り戻した緑郎様が、私の頭を両手で掴み、乱暴に前後に揺すってくる。喉の奥を突き上げられ、抜ける寸前まで退かれ、さらに押し込む。

口の中に溜まった涎などが前後するペニスによって掻き回され、すごい水音を立てていた。

「んっ、くう……!! よし……出す、ぞ……ッ！」

緑郎様がそう宣言するのとほぼ同時。

ペニスを引き抜く寸前まで腰を退いた緑郎様の先端から、熱い白い液体が私の口の中めがけて噴射された。

私はそれを一滴も零さないよう、そして飲み込まないように注意して口で受け止める。

普通、男性の一度の射精で出す精液の量なんてたかがしれている。

けれど緑郎様は自分自身の身体にも特殊な薬を投与しており、その精液の量は通常の何十倍以上。

瞬く間に私の口内は緑郎様の精液で一杯になった。大きく口を開き、上を向くことでなんとかかすべての精液を受け止めることが出来た。

どろどろとした液体が溢れんばかりに口に溢れているのを感じ、私は幸せな気分だった。

緑郎様の精液をこんなに出してもらえたのだ。メイド長冥利に尽きるというもの。

私は上を向いて精液で充ち満ちた口内を示しつつ、次の指示を待つ。

大量に射精をし、疲れたと言った様子の緑郎様は、ふらつきながらも椅子に腰掛けた。

「ああ、気持ちよかった。藍子、もうそれ使っていいよ」「ウー」

口内に注いでもらった精液がこぼれないように、慎重に口を閉じ、口の上から手のひらで押さえて方が一にもこぼれないようにする。

未だ足腰はふらふらだったけど、なんとか立ち上がって、搾乳している機械の側にいった。

搾乳機械の上部には、私から絞り出したばかりの母乳が溜まっている。

そのタンクの蓋を開き、私はそこに口内に注いでもらった緑郎様の精液を吐き出した。

そこでようやく私の仕事は終わったので、緑郎様が搾乳機を止めてくれた。

私から絞り出された母乳の白と、緑郎様が出してくれた精液の白が混ざり合い、特別な色になっていく。

さらにそこに緑郎様が特別な薬をブレンドして加え、『特製メニュー』のできあがりだ。

2リットルほどの分量になったそのタンクを機械から取り外し、ずっと涎を垂れ流して待っている七番のメイドの元に行く。

「待たせたわね。心して吞みなさい」タンクから伸びている管を、メイドの開口具に接続し、弁を解放。

母乳と精液、そして薬品の『特製ブレンドドリンク』が、七番のメイドの口内に滑り落ちていった。

第五章

私は身動きひとつできずに、じっと待っていました。眼も見えず、耳も聞こえませんでしたが、ご主人様とメイド長の愛し合う気配は感じられました。

どんな風に愛し合っているのかまではわかりませんが、それでもいまの私よりは気持ちよくなっているはずですよ。

(いいなあ……)

羨ましく思う感情はありましたが、どうしようもありません。

目と耳を塞がれた静寂の暗闇の中、膝立ちの状態で両腕を後ろで縛られ、開口具によって涎を垂れ流しつつ。

いまの体勢を維持し続けることに全力を尽くします。

静かな暗闇の中でそうしていると、自分がそういう形の置物になってしまったかのよう錯覚してしまいます。

身体を振ることくらいは出来ますが、それをしてしまうとかえって自分の状態を思い出してしまうので、身体を動かさないことに努めました。

散々刺激が与えられて敏感になってしまった乳首は、いまだラバースーツの中で固く存在を主張し続けています。

その他の部分の身体を全く動かしていないと、そのじんじんとした感覚が強調され、ますます動かしたくなってしまう。

(がまん、がまん……がまん……)

私はひたすらに頭の中で念じ続け、我慢を続けます。

身体が勝手にびくん、と反応してしまうときもありましたが、極力身体を動かさないように、ひたすら耐えます。

そうしているうちに、じわじわとあちらの疼きまでもが増幅され始めました。行き場の失った感覚が、そっちに伝播してしまつたようです。

私のあそこが、くわえ込むものもないのに、きゅっと収縮しているのがわかります。

いまその場所に棒状の何かを入れてもらえたなら。それはきつと極上の快感になるでしょう。

でも何も入れてはもらえません。ラバースーツがそこを覆っているだけではなく、金属の貞操帯が穴を完全に封じてしまっているからです。

貞操帯の内側のわずかな凹凸がそこに刺激をくれてはいませんが、そんな微々たる刺激でイけるわけありません。

(うううっ、はやく、はやく、なにかしてください……！)

次第に私の身体は、いえ、心までもが刺激を求めて震え始めました。それを意思の力でねじ伏せるのにも、限度があります。縛られた腕を動かし、ベルトを腕に食い込ませ

て痛みを発生させ、少しでも気を紛らわせます。がっちりくわえ込んだ開口具を強く噛みしめ、舌をしきりに動かして刺激を求めてあがきます。

さらに大量の涎が垂れ、胸元に落ちていききました。

(あっ……涎が垂れていく感覚が……っ、ああ……)

胸元に落ちた涎が、胸を伝っていくのが感じられました。実際にはラバーメイド服の上から着たエプロンに阻まれてしまっているのでしょうか、そんな感じがする、というだけでいまの私には十分な刺激でした。

「フウー、ウウー……ッ！」

呼吸が荒くなり、鼻呼吸では収まらなくなってきました。口枷は中央に穴が空いていますので、そこから息を吸い込み、はき出します。

しかしそうしてしまつたことで、喉が急速に乾くのを自覚しました。

(涎も垂れ流しですしね……)

気持ちいいだけではなく、苦しさも生じ始めていました。そもそも、午前中の働きで相当な汗もかかっています。

このままでは、どうしようもなくなる——そんな時、ようやく救いの変化が訪れました。

目の前に誰かが立つ感覚がしたのです。恐らくはメイド長でしょう。『特別メニュー』の準備が出来たに違いありません。

(お待ちしておりました……！ はやく、はやく恵んでください……！)

はしたないことを自覚しつつ、それを求めて舌が動き回ってしまいます。

その私の期待に応えるように、乾いた私の口内に固い管のようなものが差し込まれました。

管は口枷と接続され、滅多なことでは抜けなくなります。「待たせたわね——心して呑みなさい」

聞こえないはずの音が聞こえたような気がしました。そして。

口の中にどろどろとした『何か』が大量に入って来ました。

それは喉の奥に張り付くような粘度を持っていると同時に、むせ返るような生臭さを発していました。

とても苦いかと思いきや、部分的に甘い感覚もあつたりして、頭が混乱してまともに味がわかりません。

口内一杯にそれが広がり、鼻孔の方まであつという間にその臭いが達し、身体を仰げ反らせて悶えてしまっています。

(うえッ、うあッ、あッ、んう……！)

反射的に吐き出そうとする喉を気合いで無理矢理抑え込み、液体を喉の奥へ流し込んでいきます。

もつとも、吐き出そうにも口は口枷に繋がられた管によつて完全に塞がっていますので、吐き出したくても吐き出せないのですが。

どろどろしたものがお腹の中に溜まっていくのがわかります。

味や食感はとても人間の飲むものとは思えませんでしたが、水分には違いありません。

乾いていた喉は、潤う感覚に喜んでいました。

流し込まれるものを我慢して飲み込んでみると、それが溜まっていつているお腹が急に熱くなって来ました。まるでガソリンを入れてられて喜ぶエンジンのように、熱がお腹から全身に広がっていきます。

(あ、あつい……っ、身体が……火照って……っ)

ラバースーツの内側で、さらに大量の汗が噴き出すのを感じました。

ラバースーツと汗ばんだ肌が擦れ合う異様な感覚が全身に広がっています。それだけではありません。

全身の中でも——乳房の頂点と、足と足の間にある秘部に熱が集中していました。

飲まされている液体の中に、媚薬の成分が含まれているのでしよう。

恐ろしく身体が疼き、とても抑えられるものではありませんでした。身体を自由な範囲で波打たせて、ラバースーツのわずかな動きで快感を貪ります。

でも、あくまでわずかな刺激にしかならず、もどかしい状態からはとても脱することができません。

(あうう……っ、触って、触って、ください……！)

内心叫びますが、私の身体に触れられるのはひとりしかいません。

そう、ご主人様です。

ご主人様の許可がなければ、メイド長はおろか、私自身でさえも、私の身体に触れることは許されないので。

私の抱いているもどかしい思いを解消するにはご主人様の慈悲にすがるかありません。

身体をうねらせ、悶え、ご主人様に懇願します。体中敏感になつたいまの私なら、鞭を打たれても絶頂してしまうことでしょう。

そんな私の祈りが通じたのでしょうか。

不意に、私の耳に触れられる感覚が生じました。

「ソツ、グウツ、ハアウツ！」

本来私は耳が性感帯というわけではありませんでしたが、いまは別です。

どこに触られても気持ちよくなってしまふであろう私は、耳に触れられただけで軽くイってしまいました。

耳栓が引き抜かれ、外の音が聞こえるようになります。

「何を勝手にイってるの？ 早く『特製ドリンク』を飲み干しなさい！」

メイド長の鋭い叱咤の声が、耳朶を打ちました。

私は慌てて、流し込まれている液体を飲むことに集中します。

まだまだ量が残っていたようで、途中から飲むのが苦しくなつて来ましたが、堪えて無理矢理飲んでいきました。

あまりに大量に飲み込んだため、お腹が膨らんでいるの

がなんとなくわかります。

ラバースーツで押さえつけているはずなのに膨らむなんて、どれほど大量に飲まされたのでしょうか。

私は空恐ろしくなりつつも、液体が流れてこなくなるまで飲み干し切りました。

身体の中が得体の知れない液体で満たされています。

耳に触れられて一度イってしまったことで、乳房や秘部にはかえってもどかしい感覚が残ってしまったています。

「飲み切ったわね。口枷を外すわよ」

メイド長の呼びかけがあつて、すぐに口枷が外されました。開きっぱなしだった口をようやく閉じることができて、一息つきます。

しかしすぐに、私は地獄の苦しみを味わうことになりました。身体が疼いて疼いて仕方が無いのです。液体が吸収されていくのにつれて強くなっているのでしょうか。どんどん身体が昂ぶり、体温が上昇し、体中から快感が発生するようになってしまいました。

「んぎっ……っ、あぐっ！」

軽く身体を振っただけで、爆発的な快感が頭を襲います。両手を力の限り握りしめ、なんとか堪えましたが、際限なく快感は襲いかかってきます。

メイド長が苦しむ私の背後に回り、目隠しを取って、縛られていた腕や足を解放してくれましたが、それで快感が収まるわけありません。

それどころか、拘束によって血流が遮られていたためでしょう。

その拘束が解かれたことによって、薬に侵された血が手足の先まで通いだし、指先や足先にまで快感が生じ始めました。

「はう……っ！」

思わず胸に伸びかける手を、なんとか抑えようとしませんが、その手そのものもまた気持ちがいいので、自分で自分の腕を掴むこともできません。

結果、私はヤジロベエのように両手を斜め四十五の角度に開き、耐えるしかありませんでした。

そんな私の様子を見て、ご主人様は愉快そうに笑っていらっしやいます。

「一滴で百回はいける、なんて触れ込みの媚薬をブレンドした特製ドリンクだから。相当辛いだろうね。下手に身体に触れたらそれだけでいっちゃんやいそうなんだよね？」

ご主人様の質問に応えなければ、もっと酷いことをされてしまいます。私は快感を堪えて震えながら頷きました。

それを受け、ご主人様が私に近づいてきます。触ってもらえるのでしょうか。期待のまなざしをご主人様に向けます。涙目で、さぞかし情けない目だったでしょう。

それでも触っていただけなのであれば、それで良かったのです。けれど、ご主人様はそんな安易な絶頂を許してくださいませませんでした。

「ご主人様が手を伸ばして触られたところは——貞操帯の上だったのです。」

「ご主人様の指先が、ラバーメイド服のスカート越しに、かつん、かつんと貞操帯を叩いています。その衝撃がビリビリと秘部に響き、気持ちよくはあったのですが、とても絶頂できるほどの強い刺激ではありませんでした。」

「ふふふ……もどかしそうですね」

「ご、ご主人様……お慈悲を……」

もつと強い刺激を与えて欲しい。その一心でご主人様に懇願します。

けれどもご主人様は首を縦に振ってはくれませんでした。「ダメだよ。まだまだ、このままで仕事をしてもらわないと。……そうだね、朝にも言ったけど、夜までオナニーせずに我慢できたら、ご褒美をあげるよ。でも、我慢できずにオナニーをしたらキツイお仕置きだからね。がんばって」ご主人様は絶頂の機会を与えてはくさいませんでした。心が絶望に染まり、目の前の景色も暗く沈んだように感じました。

（この疼く身体を抱えて……午後の間ずっと我慢しろと……？　む、無理です……とても耐えられません……つ）

せめてもう一度、イかせて欲しいと思ってしまったのは、必然だと思えます。

気づけば、私は離れて行こうとしたご主人様に縋ってしまいました。

「お、お願いですご主人様……どうか……つ」

ご主人様は困ったような顔を浮かべただけでしたが、この行動は別の人の逆鱗に触れてしまいました。

「七番！　メイドの身分で、何をしているの！」

メイド長です。ご主人様の隣に立ったかと思うと、私の肩を掴み、ご主人様から引き離されて——頬に熱い感触が生じました。

平手で叩かれた、というのとはあとで気づいたことです。

そのときの私は、突如与えられたとてつもなく大きな衝撃にそれどころではありませんでした。

「~~~~~ッ！」

悶絶、とはまさにこのことをいうのだと思います。

私は張られた頬から生じた快感の嵐に、腰砕けになってその場に蹲ってしまいました。

まるで身体の中で怪獣が暴れているかのように、脳が焼け切れるかと思うほどの快感が噴き出していました。

気持ちいいのか苦しいのかわからなくなって、涙がポロポロ零れてしまいました。意味のない呻き声を上げ、ひたすら快感の嵐が通り過ぎるのを待ちます。

ようやく収まって来て、顔をあげた時には、すでにご主人様は執務机に座られていて、烈火の如く怒っているメイド長だけが目の前に立っていました。

「……ご主人様は先ほどのあなたの愚かな行動を許されるそうです。寛大な処置に感謝しなさい」

ご主人様に抑えられたのでしよう、努めて平静を装ったメイド長がそう伝えてきました。

「顔を叩くのは僕の趣味じゃないからね……藍子、僕のことを思っただけとはいえ、それなりの罰を覚悟しておいてね」

「はい……申し訳ありません」

メイドにあるまじき行動をしたのは私ですから、咎めたメイド長は正しいものでした。

けれど、そのメイド長の判断よりも、ご主人様の判断が当然優先されます。メイド長はメイドの長として、烈火の如く怒りつつも、ご主人様が不問というのならば不問にしなければなりませんでした。

「でもまあ、メイドがやっていい行動ではなかったのも事実だからね……君にもちよっと厳しいノルマを課させてもらうよ」

ご主人様のいう『厳しいノルマ』が恐ろしい響きを持って耳に染みこんで来ました。

「外に買い出しに行ってきたらおおうか。当家のメイドとして、恥ずかしくないように『例の薬』も使うよ」

そういってご主人様が合図をすると、メイド長は一本の注射器を持ってきました。

注射器には怪しげな色をした薬品が込められています。

正体の知れない薬品ではありませんが、ご主人様が毒物のような、メイドに害を与えるだけの薬品を投与することはありません。

一度首輪が外され、ラバースーツを少しだけずらして露出させられた首筋に、その薬品が注射されました。

薬品が私の身体の中に入り——すっと頭が冴え渡っていきます。

「え……？ あ、あれ……？」

驚いたことに、あれだけ疼いていた身体の快感も抑えられていました。

首輪をつけ直してもらいながらも、唐突な身体感覚の変化に戸惑います。

様子を見ていたご主人様が説明してくださいました。

「いまの薬は、一時的に発情を治めることのできる抑制剤って奴だよ。人によっては奴隷の身体を開発しすぎて、常に発情状態で会話すら出来ないようにしちゃう人もいるからね。そういう奴隷に投与して、一時的にちゃんと仕事をさせるためのものなんだ」

「そんな便利なものが……」

ただし、とご主人様は続けました。

「あくまで抑制であって消してやるわけじゃないから……薬が切れた時の発情っぷりはちよっと大変なものになるみたいだけど……まあ、その辺も物は試してことで」

いまは楽ですが、その後が恐ろしくなりました。

さっきまででさえ、メイドとしての立場を忘れてしまうほど乱れてしまったのに、それが溜まりに溜まった時、私はどのようなものになるのでしょうか。

薬が切れた時——私は私でいられるのでしょうか？

うっすらと悪寒を感じつつ、私は立ち上がりました。先のこと考えても仕方ありません。いまはご主人様の次の指示を実行するだけです。

ご主人様は机の上にあったメモに軽く走り書きをして、それを私に差し出しました。

「それじゃあ、買い出しよろしく。他のメイドに任せた分も確認して、まとめて君が買って来てね」

「はい、了解いたしました」

買い出しの仕事自体は、私も担当したことがあります。

ゆえに、仕事自体に問題はありません。

問題があるとすれば、いつ薬の効果が切れるのか、ご主人様は教えてくださらなかったことでしょうか。

町中で薬の効果が切れ、醜態をさらしてしまうことになりかねません。

なるべく急いで買い出しを済ませようと、私は屋敷の限界へと向かいます。

その買い出しに出た街中で、私は思いがけない人と再会することになりました。

第六章 愛しき旧友との邂逅

ご主人様の屋敷では、土足でほとんどの場所に立ち入ることの出来る、土足制を採用しています。

そのため、外に出る時でも私は朝履いたブーツを脱ぐことなく、そのまま外に出ることが出来ました。

一昔前までは浸透し辛かったこの土足文化ですが、最近の日本では一気に広まっているという話です。

それはいうまでもなく、私のように家で働くメイドのためでした。

ご主人様の中にはメイドはホワイトプリムと首輪以外一切身に付けさせないというほぼ全裸主義の方もおられるようですが、大抵のご主人様は、メイドにメイド服の着用義務を課しています。

そのため、メイド服に一番似合うブーツを常に身に付けさせておくために、土足で行動可能な建築様式が流行っているらしいのです。

特に、うちのご主人様のように自分一人では決して脱げないようにする拘束の趣味も合わさると、一般の日本の家庭のように、外出する度に靴を脱いだり履いたりするのは恐ろしく手間がかかります。

メイドの行動を楽にするための処置ですので、私たちメイドにとってもありがたい話でした。

「それでは、行って参ります」

絶頂抑制剤が良く利いているのか、午前中慢性的に発生していた快感も緩く、ほどよく快適な状態で、私は屋敷を出ました。

エプロンのポケットにはご主人様から預けられている買い物メモと財布が収まっています。それ以外は特に持つ必要がありませんので、歩いて近所の商店街へと向かいます。ご主人様の立場であれば、食材やその他生活に必要なものを直接屋敷配送してもらいうことも可能なはずですが、主義なのか趣味なのか、メイドが街へ直接買い出しに出ることになっていました。

それほど歩くという距離でもなく、昼過ぎの喧噪賑やかな商店街にたどり着きました。

昔からこの商店街に住み、店を営んでいらつしやるおじさまやおばさまが、しきりに道行く人に呼び込みをかけています。

「おっ、メイドさん！ 今日はいいい魚が入ってるよ！ 寄ってってくんない！」

魚屋の方が声をかけてきてくださいました。

にっこりと笑って見せてくれる白い歯が健康的で眩しいです。Tシャツの袖を肩までまくり上げ、たくましい上腕二頭筋をむき出しにした格好といい、見ていてこちらも元気をいただいています。

首から下の身体を全てラバーで覆われた私とは実に対照的です。

「ありがとうございます。他にも用事がありますので、あとで寄りますね」

私はそう応えつつ、まずは野菜から買って揃えていくことにしました。

昔ながらの商店街の景色の中を、ラバーメイド服に身を包んだ私が歩きます。

それは、とても——自然な光景でした。

賑やかな商店街を、ラバーメイド服に包まれた身体で歩きます。

普通のメイド服ならまだしも、ラバーで出来たメイド服はそれなりに珍しいらしく、通行人の方々の視線が、自分に集まっているのを感じました。

学生時代から、良くもなく悪くもなく普通だった私には、これほど人に注目された経験はなく、少し恥ずかしく感じて顔が赤くなっているのを自覚しました。

(買い出しも普段は他のメイドがやっていますからね……) 館の外に出るということ自体久しぶりで、高揚感と羞恥心が新鮮に感じられました。絶頂抑制剤の効果がなければ、感じてしまっていたかもしれせん。

街中を吹き抜ける風が身体を撫でていきます。

ラバーに覆われた身体では、それを感じられるのは顔だけでした。

極普通の格好をした人たちの間に混じると、黒光りするラバーメイド服は目立ちます。

手早く買い出しを済ませてしまおうと、ご主人様に預けられた買い物メモを見ながら、いくつかのお店を回っていききました。

買い物自体は順調に済ませていきました。

袋に入れた野菜を手提げ、商店街を歩いていますと、ふと、懐かしい声が耳朶を打ちました。

「チトセ……？ チトセじゃないか！」

背後から聞こえてきた声に、思わず足が止まります。

(いまの……声は……っ！)

私が声のした方を振り返ると、そこに懐かしい笑顔が輝いていました。

スラリとした長身に、出来る女性の代名詞ともいえるスーツのようなものに身を包んだ彼女。

その彼女は、知己の者でした。

そもそも私をチトセと呼ぶ人はそう多くありません。

「まゆこ……？」

声をかけてきたのが誰なのかがわかって、思わず目を見開いて驚いてしまいました。

しかし確かにその人はまゆこでした。

「まゆこ、ですか！」

「ああ！ なんととも奇遇だねえ、こんなところでチトセに会うなんて！」

まゆこ——私の親友の、加納路まゆこは学生時代とன்றら変わりない笑顔と、豪快な態度で私の背中を叩いてきました。

ラバーとラバーが触れあう独特の音が響きます。

「まゆこも、この近くのご主人様に仕えていたんですか？」
「いや、実はあたしはね——」

そう言ってまゆこは現状を説明してくれました。

彼女は、現在とある企業の社長を主人として働いているそうです。外回りを主に担当していて、契約の確認や調印を主に行っているのだとか。

この街にはその関係で偶然立ち寄ったららしいです。

「まゆこにはぴったりのご主人様ですね。その格好も似合っていますよ」

「何言ってるの。チトセのメイド服の方がよっぽど似合ってるよ。ちよつと変わってるけど……まあ、あたしも似たようなもんだね」

そういつてまゆこは私を褒めてくれましたが、まゆこのOLスタイルの方が遙かに様になっていると、私は思いません。

動きやすいように後ろでひとつに縛られたポニーテールは快活な彼女によく似合っていますし、そんな彼女の細い首を覆う無骨な金属の首輪もギャップがあつてとてもいい

です。

着ているビジネススーツのように見える服は、材質が上質なラバーで出来ていることが一目でわかりますし、その上からアクセントとして彼女の腰を細く引き絞っているコルセットが、彼女の美しいスタイルを際立たせています。

袖口から覗く手も薄いラバースーツに覆われていて、生身とは全く違う色気を醸し出していました。

タイトスカートから伸びるまゆこの長く細い足も、ラバーで覆われていますので、恐らくですが私たちと同じようにインナーとして全身一体型のラバースーツを身に付けているのでしょうか。

ヒールの高い靴を履きこなし、かつかつと音を立てて歩く様はまさにキャリアウーマンという感じですが。小脇に抱えたビジネスバッグも実に様になっています。

ただ、首輪を身に付けさせられていたり、ラバー素材で出来た服を着せられたりしていることからすると、うちのご主人様と似たような性質を持つご主人様なのかもしれない。

私がそう思いつつ、自分の方の現状に説明すると、まゆこは「なるほど」と納得したように頷きました。

「卒業してから全然連絡くれなれなと思っただけ……そっかー。自由時間がない系のご主人様に仕えてたのか。それじゃあ仕方ないね。……しっかし、寝るときまで完全拘束って良い趣味してるわ……寝れるの？」

「慣れたら以外と楽ですよ？ 数日に一度は解放される私はまだ楽な方ですし……同僚の中には全然解放されない人もいるくらいですから」

「うへえ……あたしにや無理だわ」

そういつてまゆこは渋面を作ります。それが嫌味にならず、様になるのですから美人は得と言いますかなんと云いますか。

「まゆこは優秀ですからね。じっとしているのは苦しいでしょう」

だからこそ、ただ拘束するだけの状態ではなく、自由時間も与えてくれるようなご主人様に仕えることが出来ているのでしようし。

「……本当に、特権階級になれなかったのは残念でしたね」
学生時代から、まゆこの優秀さは群を抜いていました。私のような凡人とは根本的な出来が違うと何度も思ったものです。

そんな私にも、まゆこは優しく接してくれていましたが、正直に思っていたことを伝えると、まゆこは気恥ずかしそうに頭をさきました。

「いやー……優秀っていつても、所詮あたしなんざは凡人の範疇だったよ。卒業前の最終試験で少しだけ一緒になっただけ、実際に特権階級になれるようなご主人様たちはまじで化けもんだね。特権を許されるだけのことはある」

でももし特権階級になってたら、とまゆこは続けました。

「そのときはチトセを従者に指定していたんだけどねー。そしたら毎日毎晩愛し合いたい放題だったのにさ」

熱烈なまゆこのラブコールに、私は少し顔が赤くなるのを感じました。

「またそういうことを……学生時代、仲良くしてくれていたのは嬉しいですけど、きつと私よりも優秀な従者がたくさんついてくれましたよ？」

「それでもあたしはチトセが良かったんだよ」

まゆこはそんなことを堂々と言い切るので。

そんな未来もあつたのかなと思いますが、そうならなかったのが現実です。

私は曖昧に笑うだけで済ませることにしました。

「ねえ、まゆこ……従者階級の期間が終わったら、一緒に旅行でもしましょうか」

従者階級には、その階級でいられる期間、というものがあります。

その期間のご主人様の考えによって違いますが、うちのご主人様は遅くとも三十代後半くらいで役割を解いてくださいます。

大体の従者期間はそれくらいで終わるので、まゆこの従者期間も同じくらいに終わる可能性は高いです。

特権階級に長く仕え、解放された従者階級の者達には、報酬として相応の期間自由にする権利が与えられるのです。

ただしそれは——お互い無事に従者期間を過ごせれば、ということになります。

私の提案に、まゆこは物凄くいい笑顔を浮かべてくれました。

「おっ、いいね。楽しみだよ！ あたしは休みの日に色々旅行に出かけたりしてるから……その時は色んな場所を案内してあげる！」

「……楽しみにしていますね」

きっと彼女と一緒に楽しい時間を過ごせることでしよう。

そんな未来を想像して少し胸の奥が暖かくなり——

どくん、と心臓が高まりました。

思わずメイド服の上から胸を抑えます。

普通に歩いていただけなのに、急に心臓の鼓動が早くなっていました。

(……っ、まずい、ですねこれは……まさか……っ)

ご主人様曰く、私に投与した薬は快感を抑制し、絶頂しなくて済むようにするためのものらしいので、快感を消してくれているわけではなかったのです。

つまり、私の身体は歩いている間も、普通に快感を覚えていたはずなのです。

その抑制剤の効果が消えかけているようです。

「チトセ？ どうかした？」

一緒に歩いていたまゆこが、急に足取りの重くなった私を心配してそう声をかけてくれます。

私はまゆこに気づかれないように、なんとか笑顔を作りました。

「なん、でもありません、よ？」

さっきまでは全く気にならなかった身体が疼いています。ラバースーツの中で、胸の頂点がじんじんと刺激を求めて固くなっているのがわかりました。

貞操帯を填められた股間には、貞操帯の微妙な突起が歩く度に刺激を与えて来ます。

幸いまだそんなに性感は高まっていませんが、このままだと感じすぎて歩けなくなってしまういかねません。

「ま、まゆこ。すみませんが、私は屋敷に戻らないと……」
そう考え、まゆここと別れようとしたが、まゆこは首

を横に振りました。

「体調が悪いなら、手を貸すよ？」

「だ、ダメですよ。まゆこも仕事があるでしょう」

外回りということは、時間までに所定の場所に行かなければならないはず。

多少の雑談くらいなら大丈夫かもしれませんが、余計な場所に立ち寄っている暇はないはず。

「う……それはそうだけど……」

まゆこもご主人様には絶対服従の従者階級ですから、多少の裁量を任されていたとしても、完全に命令を無視するわけにはいきません。

「私は大、丈夫ですから、また、会いましょうまゆこ」

まゆこはそれでも私を心配して迷っていましたが、下手について行かない方がいいと判断してくれたようです。

「……わかった。じゃあチトセ。必ずまた会おうね」

そう言つてまゆこは踵を返し、その場から去って行きます。久しぶりに懐かしい親友に会えて、少し郷愁に焦がれてしまいました。

(ふう……さあ、帰らないと、ですね)

感覚が激しくなる前になんとかまゆここと別れられて良かったです。

こう言つたことをされている、というのは程度の違いこそあれ、まゆこも変わらないはずです。

巧妙に隠されていましたが、私もよく馴染んだ臭いが彼女からもしていましたから。

だから本当は感じてしまつていふことを、まゆこに言つても良かったはず。でも、それを彼女にいうことがどうしようもなく、恥ずかしかったのです。

(学生時代には、まゆこことそれ以上のこともしたんですけどね……大人になると、感覚が違いますね)

しみじみと思い返しつ、私は急いで屋敷への道を歩きます。走ることはできません。

歩く刺激でさえ、どんどん苦しくなつていふのに、走りなんかしたら大変なことになります。

焦りが胸を焦がすのと、抑制剤が完全に切れて身体の感覚が通常に戻るの、ほぼ同時でした。

「あつ、ぐう……っ！」

性感帯が疼いて、嫌な汗が全身から噴き出します。思わずふらついた足を叱咤しつ、倒れる前に近くの電柱に寄りかかりました。

身体の中で快感が暴れ、今にも爆発しそうです。

貞操帯に封じられたあそこが、燃えているように熱く、なんでもいいから長い物を突っ込んで掻き回したくなる衝動にかられます。

(がまん、がまん……っ、とにかく、屋敷に、かえらなきや……！)

こんなところでメイドが倒れたとなつたら、ご主人様の醜聞に繋がりがかねません。それだけは回避しなければなりません。

ご主人様の名誉のためでもあります——そんな粗相をやらかしたメイドが、平穩無事に済ませてもらえるわけがないからです。

解放の時まで、封入回廊に閉じ込められたまま過ごすことになるかもしれせんし、それ以上の何か恐ろしい実験

に使われてしまう可能性もあります。

私はいまにも崩れそうになる足を叱咤して、屋敷への帰り道を急ぎました。

あまりに激しい衝動のために、目が霞んで、手足の感覚がなくなってきました。

(あと……少し……!)

頑張った甲斐あって、屋敷の姿が見えて来ます。

ほっと息を吐いたのが、よくなかったのでしょうか。

いえ、恐らく油断せずに気を張ったままでも意味はなかったでしょう。

貞操帯の中に仕込まれたバイブレーターが、突如振動し始めたのですから。

十分以上に感度の高まった秘部への振動の刺激は、あまりに強烈なものでした。

「くっくッ!」

思わずたたらを踏み、ふらついた身体を支えるため、屋敷の壁に手を突きます。買い物袋を取り落とさなかったのは、自分で自分を褒めてあげたいくらいです。

まるで電流でも流されているかのように、私の身体が勝手にびくんびくんと跳ねます。一瞬だけでも十分すぎるほどだったのに、振動する機械は情け容赦なく、さらに刺激を私のそこに与え続けてきます。

(……っ! そ、んな……っ、こんな、機能……しらな……はうっ)

ご主人様の言いつけを守れなかったなどで、私たちメイドに取りつけられるこの貞操帯は、造りは非常にシンプルなものでした。

外からの刺激を一切遮断すると同時に、秘部に押しつけられる突起が刺激を与え続け、際限なく快感を生み出していくのと同時に、決してメイド本人ではどうしようもできなくするだけのもの。

なので、ローターやバイブといった機能は付けられていませんでした。ご主人様は機能美を追求する人なので、貞操帯には貞操帯の、バイブにはバイブの機能を求めるためです。

もちろん単なる拘りなので、例外的に振動する機能を付けた貞操帯を用意することは可能でしょう。

でもそれがなぜよりもよっていま私に付けられているのか。いえ、私が知らないだけで、外に買い出しに行くメイドはいつもこの貞操帯を身に付けさせられているのでしょうか。でも外に出るのが決まったのは、貞操帯を付けたあとのはず。

真相はわかりません。

重要なのは、抑制剤まで使われ、限界一杯まで昂ぶった私の身体には、その振動機能は刺激として強すぎたという点です。

「あつ、ああつ、あうつ、あ、ああああ……っ」

絶頂が連続で襲いかかって来て、目の前に星が飛び散ります。頭を殴られるのと、私の受ける衝撃としてはそう違いはありませんでした。

壁に付いた手が滑り、膝から地面に崩れ落ちます。

もう屋敷の門は目の前だというのに、そこまで歩いて行くことも出来そうになりません。

購入したものの無事を確かめるまもなく、私は自分の身体が地面に倒れて行くのを感じ——そして、その衝撃はいままで以上の快感となって私の全身を強く突き抜けていきましました。

胸が地面に擦れ、そこからも想像以上の刺激が発生します。

はたから見たら、陸地に打ち上げられた魚のように見えたくもありません。

涙と鼻水、涎を垂れ流し、生暖かい感触が下半身を中心に広がっていくのを感じつつ、胸と秘部から感じる強すぎる快感の渦に巻き込まれ——意識を失ってしまいました。

そんな私の様子を、カメラ越しに見ている人がいることにも気づかないまま。

第七章 水で固定されるメイド

私が目を覚ました時、身体は寝かされた状態にあるようでした。

ようでした、というのは、私は目を覚ましたものの、その目に何も映すことができなかつたからです。

何か分厚い布のようなものが瞼の上にあつて、瞼を開くことを阻害していました。それを取り除こうにも、手足はいつも通り動かないため、不可能でした。

普段から寝る時は封入回廊にて動けない状態にされているので、目が覚めて身体が動かなくても、目が見えなくても、パニックにはなりませんでした。

慣れというのは恐ろしいものです。

(私……どうなったんでしょう……?)

寝起き特有のぼんやりとした感覚はありましたが、意識は思ったよりもしつかりしていました。

気を失うまでは全身から生じる快感の濁流に翻弄されていたのですが、いまは全くそういうことはありません。

その理由は、冷静に考えればわかります。

また絶頂抑制剤が投与されたのでしょうか。薬が切れた時のことを思い出し、背筋を悪寒が走ります。

(またさつきみたいになつたら……私は耐えられるんでしようか……いえ、それよりもまずは状況の把握をしませんと……)

まずは身体の状態の確認です。

仰向けに寝かされた体勢にあり、手はまっすぐ身体の横に伸ばされていました。動かそうとしても、指先も全く動きません。普段人型の中に閉じ込められている状態より、さらに嚴重に拘束されているようです。

(……? 太ももに手が触れている感覚がない……?)

手を動かそうとした際、ほんの数ミリは動いている感じがしたので、太ももにその感覚が伝わってきませんでした。分厚い拘束具によって遮られているということも考えられますが、それ越しのわずかな感触すらないというのは異常です。

(それに……指同士の感覚もないような……んん……っ、……だめですね、全然動きません)

たとえば指が分かれていない手袋をさせられているのだとしたら、指を動かそうとすれば、指同士が擦れ合う感覚はあるはずです。しかし、私の手は指を軽く開いた状態で動かせませんでした。

(指の一本一本まで別々に拘束されている……なのでしょう?)

ともかく、腕は指先に至るまで一ミリも動かせないということがわかりました。

次に足の状態を探ります。

肩幅程度に開いた状態で、膝をまっすぐ伸ばした状態から動きません。

足先はどうかと動かそうとしてみましたが、足首は90度に固定された状態で動きませんでした。これはいつもとあまり変わらないので、問題ありません。

私を驚愕させたのは、足の指のことです。手の指と同様に、曲げることも開くことも出来なかったのです。

(足の指まで……！もしかして、樹脂が何かに漬けて固められてしまったのでしょうか……)

そんな風に拘束——ではなく、固められてしまったメイドを私は知っていました。

私よりも遙かに前に雇われたというそのメイドは、とてもドジな女の子で、掃除中にご主人様が大事にしていた花瓶を割ってしまったとか。

そのため、特殊な樹脂によって全身を固められ、オブジェとしてずっと飾られているという話を聞きました。

もちろん、殺されてしまったわけではなく、ちゃんと生命維持のための装置は取りつけられてはいます。

ですが、少なくとも私が知る限り、その子がオブジェから解放されたところは見ることがありませんでした。常に同じ姿勢のまま、立ち続けています。

(買い出しの途中で、屋敷の前とはいえ絶頂のあまり気絶してしまっただけですから……相応の罰はあると思いますか……こうなってしまうましたか……)

私もあの彼女と同じように全身を固められ、もう二度と解放されることはないのでしょうか。

そう思い、沸き上がってきた恐怖がパニックを誘発する寸前、私はそれにしては妙なことに気づきました。

樹脂固めでオブジェにされてしまったあの彼女は、綺麗なポーズを取っていたということに。

調度品として飾るのですから、形にこだわるのは当然でしょう。それなら、いまの私が取らされている直立不動みたいなポーズはあまりにも工夫がなさ過ぎます。

(調度品としてですらなく、ただ格納されるだけになるという可能性もありますが……)

私たち従者階級の人間は「資源」ではあっても、使い捨てていい「物」ではありません。いくらご主人様が特権階級だとしても、ひとりのメイドを飾りもせずにしまい込むというのは出来ないのです。

無論、いくらでも抜け道のある制限ではありますが、ご主人様の性格を考えても、ただ閉じ込めて仕舞ってしまうというのは考えにくいことでした。

(考えられるのは……この状態が罰として与えられているということ……つまり、罰を耐えきれば、いままで通りに普通のメイドとして使ってもらえるかも……ッ！)

厳しい罰を与えるための、一時的な拘束だと考えれば納得がいきます。特に両足を開いたこの体勢は、あそこが無防備に晒されているので弄りやすいことでしょう。

ここから解放される可能性がある、と思えば少し余裕が生まれました。

それが実際にどうかはともかく、希望があると思えるのは精神的に良いことです。

(……手足は完全に拘束されているようですが……他はどうなのでしょう)

耳を澄ましてみます。どくんどくんという少し速い自分の鼓動と、小さな呼吸音くらいしか聞こえません。恐らく寝る時と同じように耳栓がはめられているのでしょうか。

身体は全く動かせません。首から上もそういう型に詰め込まれているかのように、前にも後ろにも、右にも左にも動かせません。

では呼吸はどうかというと、口はマスクのようなもので完全に塞がれているらしく、口を開くことも出来そうにありませんでした。

鼻呼吸はなんとかできますが、管のようなものが刺さっているらしく、詰まっているような感覚があつて、浅く短く呼吸することしかできません。深く息を吸おうするのは不可能なようです。

そもそも、身体が拘束されているので、空気を吸い込んで胸を膨らませることが出来ず、かなり苦しい状態です。

(でもなんだか……妙な感じも……するようない……?)

身体感覚だけではその妙な感じの正体は明確にわかりませんが、すぐにその感覚の正体は判明しました。

私が寝かされている部屋の空気が動いて、身体に当たる感覚が生じたからです。

(つ……こんなにしつかり拘束されてるのに、風を感じる……という事は……)

どこで風を感じているかがハッキリすれば、どうして風を感じる事が出来たのか、理由もよくわかりました。

空気の動きを感じることが出来た場所は——乳房と股間だったからです。

拘束されている手足や首から上と違って、そこだけが露出している理由は明確です。弄りやすくするためと思えません。

それにしても、さっきまで空気の動きが全く感じられなかったのに、急に空気の流れを感じられるようになったのはなぜなのでしょう。

その疑問にも、すぐ答えがもたらされました。

耳の奥で小さなノイズ音がして、聞き慣れたご主人様の声が聞こえてきたからです。恐らく、空気が動いたのはご主人様が部屋に入って来たからで、それまでは全く部屋の中に動きがなかったのでしょうか。

『七番、おはよう。目は……覚めているみたいだね』

優しく響くご主人様の声。私の状態はモニタリングされているらしく、それを見ているのでしょうか。

『最初に……そうだね、状況がわからないだろうから説明してあげようか』

ご主人様の声は、いつも通りでした。怒ったり呆れたりしている様子はありません。

過度な不興を買ってしまった様子が無いことに、少し安心しました。ご主人様は話してくださいませ。

『えーと、屋敷の傍で気絶したのは覚えてるかな？ あれなんだけど……ごめん。ああいうギミックつきの貞操帯だつてこと忘れてた！ 外から屋敷に近づいたら自動的に震える設定にしてたんだよね』

（ああ、なるほど。それで、それまで動いてなかったのに屋敷が見えると同時に震え始めたんですね……）

『それだけならまあ、我慢できない方が悪いんだけどさ……それにプラスして絶頂抑制剤は誰であつても我慢できるわけがないからねえ。元はといえば僕のポカだし……重い罰則はかけないから安心して』

そのご主人様の言葉に、少しほっとします。でも、その安堵は一瞬だけしか続きませんでした。

『ただし——屋敷の前で倒れてちよつとした騒ぎになつたのは事実だし……何のおとがめもなしつていうのもそれはそれで問題かなつて思つていてね』

不意にむき出しの胸に触れてくる感触があつて、思わず私は自由に動かない身体を緊張させてしまいました。全身を締め付けている拘束が軋む音が響きます。

ご主人様の指らしきものが、私の乳房に触れ、摩り、そして揉んでいます。

たちまち私の乳首は硬くなつてしまったことがわかりました。

その敏感になつた乳首を、ご主人様の指先が軽く弄んで来たかと思うと——唐突に、思いつきり摘ままれ、捻り上げられます。

激痛が電撃のように私の頭を貫いていきました。

「ウグツ、ギイウツ！」

可能な限りの全力で、身体を動かそうとしましたが、厳重な拘束は緩むことなく、私は目の前が真っ白になるような激痛に悶えます。

そんな私のわずかな反応を見て楽しんでいるのでしょう。ご主人様の楽しいげな笑い声が聞こえて来ました。

そして、こう告げるのです。

『あははっ。……というわけで、君にはちよつと地獄の体験ツアーをしてみようと思う』

ご主人様に捻り上げられた乳首から、ジンジンとした痛みが生まれていました。いまは離してくださいませでしたが、いまだに摘ままれていような感覚があります。

それだけ凄まじい痛みだったので、無理もないのですが。

いまの私は、視覚も聴覚も塞がれ、触覚もほとんどが封じられています。

ご主人様が移動する際のわずかな空気の動きしか感じられませんが。

そのため、ご主人様がどこにどう移動したのかわからず、不安を感じてしまいます。

そんな私の耳の奥に、ご主人様の声が響いてきました。『まずはいまの自分の状態を確認してもらおうかな。なかなかすてきな状態になっているよ』

ご主人様がそう楽しみに言うと、目を抑えていた分厚い目隠しが外されました。急に視界が明るくなり、思わず目を眇めてしまいます。

少しずつ明るさに慣れてきた視界に、鏡が飛び込んできます。

そこに映っているのは、私、なのでしょうか？

一瞬そう思ってしまったほど、私の姿は気を失う前から一変していました。

私の身体のほとんどは、ダクトテープのような黒い帯状のもので覆われていました。外見だけを見れば、人型の黒い塊にしか見えません。

足先から頭のとっぺんに至るまで、ミイラよりも嚴重にぐるぐる巻きにされています。

その中で、股間と胸、そして目だけがそのテープが巻かれておらずにむき出しになっています。

そこだけ素肌が露出していました。鼻の部分からは管が飛び出していて、やはり鼻の穴には管を通してあります。それがどこまで続いているのかは、外見からはわかりませんが。

普段ラバースーツを身に纏って肌の露出を限りなく抑えているだけに、胸と股間がむき出しになった状態は恥ずかしく思えます。

私は手術台のような大きな机の上に寝かされていました。ただ、背中などが台に触れているはずなのですが、その感覚は全く感じられません。巻かれているのはテープに見えますが、相応に固い素材のようです。

それにしても、つきり樹脂で固められたと思っていたのですが、こういう形で拘束されているとは思いませんでした。

ただ、これなら、指のひとつひとつまで個別に拘束できるのも納得です。

私が言葉もなく自分の姿を見つめていると、ご主人様が身を乗り出して視界に入ってきました。

『いいでしょ、このテープ。これ自体はただ保水力に長けたテープなんだけどね。含ませた液体に秘密があるんだ。その液体はね……ま、実際に体験した方が早いかな』

ご主人様はそういって、再び私の視界の外に去っていきましました。

一体どんな機能を持った液体なのでしょう。

どんな機能であれ、楽になれるものではなく、私を厳しく苦しめて躓けるものなのでしょう。

私はそんな想いを抱きつつ、ご主人様が次に行うことを受け入れて待ちます。自分ですが、自分とは思えない目の前の身体をじっと見つめていました。

その身体が、強い光で照らされます。

いままでとは比べものにならないまぶしさに、思わず瞼を瞑ってしまいました。

それと同時に、全身から熱湯をかけられたような熱を感じました。

「ングッ、ンン……ッ！」

思わず身体を硬直させ、拳を握りしめたところで、手が動いたことに気づきました。

手を顔の前に持つてくると、厚いテープが巻かれています。動かしにくいものの、いままでのように一ミリも動かない状態とはまったく違います。

両手を目の前に持つて来て、手を開け閉めすると同時に、足も動くようになっていたので、開いてしまっていた足を慌てて閉じます。むき出しになっている乳房と、秘部を手で隠しました。

私が動き出したのを見て、ご主人様が満足そうに頷いていました。

「よし、動けるようになったね。じゃあ立つて」

命令に従い、私は身体を起こしました。いままで視点が固定されていて見えていなかったのですが、どうやら地下室のひとつに運び込まれていたようです。部屋には様々な機械や道具が置かれています。

机から降りて立ち、ご主人様に向き直ります。

それと同時に、今度はさつきとは色の違う光が当てられました。すると、また身体に巻かれているテープが熱と共に固くなり、指先ひとつ動かせない堅牢な檻と化します。

「あ、ちなみに触れてる部分には張り付いちやうから、自由な時でも自分の身体は触らない方がいいよ」

（お、遅いですよう……!）

胸と股間を押さえていた腕は、その場所に張り付いてしまったらしく、間違えて接着剤でくっつけてしまったかのような状態になっていました。

もつとも、身体全体が動かなくなっているので、その状態から無理に動かそうとして皮膚が剥がれるという悲劇は結果的に回避されました。

触れている場所に張り付く効果は、利点もありました。

私は中途半端な姿勢で固められてしまったのですが、足の裏が床に張り付いてしまったために、倒れたりする心配が要らなかつたのです。

別の人が体当たりするなど、外部から力がかかったらどうなるかはわかりませんが。

少なくともほぼ自由のない私が暴れた程度の力では、床から剥がれそうにありません。

「大体わかったと思うけど、君の身体に巻いてあるテープには特殊な光を照射することで硬化したりそれが解けたりする液体が含まれているんだ。だからこうして、気軽に完全拘束状態と非拘束状態を切り替えることが出来るし、他にも……」

ご主人様が手に持った懐中電灯のようなもので、私の胸を抑えている腕を照らしました。すると、その腕だけが自由に動かせるようになって、むき出しの乳房がふるんと揺れます。

(きやあっ！)

恥ずかしくなって再度隠そうとした私より早く、ご主人様が再度光を照射して私の腕を中途半端なところで固めてしまいます。胸を隠すことが出来なくなりました。

「こんな風に、一部だけを解除したりも出来るわけ。すごいでしょ。もちろん、人体に害はないから安心してね。色々応用が利きそうでねえ。試してみたかったんだ」

ご主人様はニコリと笑顔を浮かべて、私を見ます。

そういう笑みを浮かべているご主人様が、何を考えているのか。私にはわかりませんが、決して私にとって楽なことではないのだろうな、という予感がありました。

「さて、と。説明終わり。一端全体を解除するから、命令した通りの姿勢を取ってね」

光の照射を受け、私の身体は自由になりましたが、股間や胸を隠すことはせず、気をつけの姿勢を取ります。

それはご主人様に恭順する姿勢であり、無意味に刃向かうことをしないという意思表示のつもりです。

それをご主人様も理解してくださったようで、嬉しそうに笑顔を浮かべておられました。

「うん。そういう真面目で素直な子は好きだよ。褒めてあげる。罰は罰だから与えるけど」

温情で見逃されたりはされませんでした。

(まあ、そういうつもりでしたことではありませんしね)

ご主人様は私に取るべきポーズを指示してくださいます。「両手は頭の後ろに回して。肘は頭の横に。そう。背筋はまっすぐ胸を張って。足はがに股に開いて、腰を突き出して。つま先は出来る限り横に向けて。そして、ほどよく腰を落として。……そうそう。いいよー」

ご主人様はとても楽しそうでした。

「うん——凄く無様だ」

にっこりと笑顔を浮かべたご主人様が、特殊なライトで照らし、私を完全拘束状態にしてしまいます。

私はむき出しの胸やあそこを無防備に晒した、自分の意思で取るとしたら恥ずかしくすぎる体勢から動けなくなりました。

突き出すように晒した秘部が熱くなり、じつとりと熱を持った露が滲んで零れ出していくのを感じます。

私の身体は、見られることに興奮してしまっているのです。こんな恥ずかしい体勢を取らされただけで興奮するほど変態ではなかったはずなのですが。自分の身体の反応に戸惑います。

ですが、その理由はすぐにわかりました。

どくんどくと、心臓の鼓動が急に早くなってきたからです。

「ウウ……ウウツ……っ」

身体が疼いて、自由のない口で呻いてしまいます。それを見たご主人様は、一瞬探るような視線を向けた後、得心したようにひとり頷いておられました。

「ああ、絶頂抑制剤が切れたみたいだね。元々説明のためにちよつとしか投与しなかったんだけど、想定よりはちよつと早いな……うん。やっぱり薬は連続して使うと耐性ができちゃうってことか」

しみじみとした様子でご主人様は呟いておられました。私の方はそれどころではありませんでした。後から後から沸き上がる快感が、胸の頂点や股間に集中し、えぐり出したいほどの疼きに変化していました。

でも、私の身体は全くといっていいほど動きません。

それぞれの場所がむき出しになっているからこそ、余計に疼きが際立ち、私はどうしようもなく、動かない身体を

震わせます。

「現状もわかっただろうし、もういいかな。罰の期間が過ぎたら普通に戻してあげるから、がんばって耐えてね」

ご主人様はそう言つて、私に再び目隠しをかけてしまわれました。視界が遮断され、続いてご主人様の声も聞こえなくなります。

どうやら、スピーカーのスイッチを切られてしまったようです。

女の急所を無防備に晒した無様なポーズを取ったまま、無音の暗闇にひとり放り出されます。

「フウ、フーツ、フーツ……!!」

かといって、疼く身体が収まるわけもなく、視覚も聴覚も遮断されたことで、かえつてその疼きに意識を向けてしまいます。気を紛らわせる方法がなく、私は気が狂うほどの疼きに耐え続けなければなりませんでした。

ですが、それがまだ序章にすぎないということを、このときの私はまだ気づいていませんでした。

第八章 メイド・犬山チトセへの罰

目の前に、無様なポーズで固まったメイドがいる。

調整ミスで屋敷の前でぶっ倒れることになってしまった彼女には同情せざるを得ない。

無罪放免としても問題はなかったのだけど、メイド長が納得しなかったのだから仕方ない。

名前も覚えていない一般メイドだけど、真面目で可愛くてエロいメイドだし、ちよっと手心を加えてあげてもいいかなという気はあった。

ただ、やりたいことはやりたいことであつたので、耐えられるように祈っておこう。

まずは、無防備に突き出されたおっぱいの処理から始めるとする。

処理を始める前に、状態を確認。絶頂抑制剤が切れて快感が沸き上がっているからか、さつき捻り上げた乳首だけじゃなく、触れもしていないはずの乳首もビンビンにとんがっている。軽く指先で摘まんでみると、想像以上の固さを返してきた。

「ングウ、ツ」

口は完全に塞がっているので、何も言えずに呻くメイド。さつきみたい捻り上げられると思っっているのかもしれない。ご期待に応じてあげようかと思っただけど、今回の目的はそれではないので、やめておいた。

摘まんだまま軽く手を動かすと、柔らかそうな乳房がぷるんぷるんと揺れる。胸が成長していたあのメイドに比べると小ぶりだけど、ちょうどいいボリューム感で、手のひらに収まる感じがとてもいい。

「さて……と。始めようか」

せっかかない感じのボリュームではあるのだけど、あえてその乳房を弄る。

取り出したるは、専用の注入器。注射器の先端が管になつていて、普通の注射機よりも大量の液体を注ぎ込むことを目的とした形状をしていた。

まず、十分に勃起した乳首に、特殊な注入口を取りつける。要は針を通すようなものだから、物凄く痛いはずだ。

「ンン……ッ！」

完全拘束していなければ、手足を振り回して暴れていただろう。

けれど、完全拘束状態にある彼女の身体は、ギシギシとテープを軋ませただけで動かなかつた。

注入器にたっぷり液体を込め、管と注入口を接続する。そして、情け容赦なく、無造作に注ぎ込んであげた。

「ンギイイイッ！」

口や鼻が塞がっているとは思えないほど、大きな声で彼女が悲鳴を上げる。さらに激しく身体を拘束するテープが軋み、その硬度が足りなければ振り払っていたのだろうというところが明らかかなほど、全身全霊を込めて暴れていた。

まあ、それも無理はない。乳腺に外部から液体を注入して、乳房を膨らませただけだから、今頃彼女は乳房が張り裂けるほどの激痛を覚えているはずだ。

存分に注ぎ込んでから、管を外す。刺した注入口は弁にもなっていて、注いだものがあふれ出すという心配もない。彼女の右のおっぱいは、左のおっぱいに比べて、一回りは大きくなっていた。当然このままでは不格好なので、左のおっぱいにも同じように液体を注入して膨らませる。

そちらの処理も終わったとき、叫んでいた彼女はすでに息も絶え絶えの様子だった。

(ふふ……ここからが本番なだけだね)

次に取り出したものは、透明なブラジャーだ。

無論布製じゃなく、強化プラスチックのような、固い材質で出来ている。

刺しっぱなしの注入口が嵌まる溝があって、その中に注入口を納めつつ、彼女の乳房を完全に覆う。

背中側で鍵をかけて止められるようになっていて、サイゾアップした彼女のバストは綺麗にその中に収まった。軽く手の甲で叩いて見ると、こんこん、と抵抗感があって、乳房の形は変わらない。

「んっ」

振動は感じたようで、小さく呻いたが、それ以上の反応はなかった。

「よし、これで……と」

いよいよ本命だ。どんな反応をしてくれるのか、わくわくしながら透明なブラジャーの中に収まっている乳房に向け、先ほど彼女の全身に向けて照射したライトを向けた。透明なブラジャー越しに、乳房が光に照らされた瞬間。

「——ッ！」

あらん限りの声を振り絞って、彼女の喉から悲鳴が迸った。拘束を破壊しそうなほどの音を立て、彼女の身体が全力で暴れる。

彼女の乳房を膨らませている液体は、当然ただの液体などではなく、ライトの照射によって硬化する液体なのだ。

その液体が乳房を膨らませている状態で、硬化すればどうなるか。おっぱいのない僕には想像するしかできないけど、凄まじい激痛が走るのは間違いないだろう。

自由のない身体を震わせることしばらく、彼女の股に開かれた股間から、黄色い液体が噴き出した。あまりの激痛に漏らしてしまったようだ。

それがかからない距離に後退しつつ、苦笑いを浮かべる。

「あらら……仕方ないなあ」

こちらの行動の結果とはいえ、粗相をしたのは事実。耐えろという方が無茶なこととはわかっているけど、それはそれ。粗相は粗相。

「追加決定、だね」

元々着ける予定だった責め具に加え、さらなる責め具を追加することを決めた。

ほぼ全身を拘束具によって覆われた彼女に残された最後の場所。

最後にあえて残した、最大の責めるべき場所。

それは、当然彼女の股間のことだった。

股間に対する責め具を、机の上にずらりと並べる。それらの道具は、いずれも凶悪な形状をしていた。

尿道を貫き、奥で先端が膨らんで固定するカテーテル。

膣を押し広げ、凶悪なほどの可動域を有するバイブ。

肛門に突き刺し、内部を抉って広げるアナルバルーン。

クリトリスを吸引し、断続的に刺激を与える吸引器。

そしてそれら全てを包み込んで固定する、パンツの形をした金属——貞操帯。

最後に取り付けるものは構造上、貞操帯だと決まっていたけど、他のものはどれから取り付けても順番だけの問題で、大した差はない。

「あっちがいいかな……これがいいかな……悩むなあ」

取り付ける側は気楽なものだ。どれから取り付けても楽しめることはわかっている。

取り付けられる側に見れば、恐怖の時間だっただろうが。

いや、今回に限って言えば取り付けられる側は器具が見えていないし、それどころではないだろうから、恐怖は感じずに済んでいるだろうか。

それが幸いかそうでないかは、本人にはわからない。（今度誰かにやるときは、最初は器具を見せて反応を見てみようかな）

そんな彼女は、先ほど限界まで膨らまされた乳房から生じる、不気味な感覚に必死に耐えているようだった。

普通ならば気が狂うほどの激痛であろうその感覚は、昼に投与された媚薬の効果が絶頂抑制剤によって高められたことにより、あらゆる刺激を快感に転じているはずだ。

呼吸する度に生じる、乳房に針を幾重にも刺されているような痛みは、神経を焼くほどの快感に変わる。

口が自由なら、涎を撒き散らしてみつともなく喚き回っていたことだろう。

それでも、彼女の身体は全く動かず、固定された状態のままを維持している。

「よし、これからしようかな」

視覚も聴覚も奪われた彼女に、何が最初の責め具として選ばれたのかは知る由も無い。

僕が選んだそれは、非常に無骨な形をしたアナルプラグだった。

早速それを取り付けようと動きかけ——大事なことを思い出して思い留まる。

「おつといけない……：：：：そういや、この子は今日処理をしてないはずだから、溜まつてるものがあるよね」

メイドには日に何度か排泄物の処理を行うように指示を出していた。

そうしておかなければ、不都合なことが多いためだ。

けれど、このメイドは朝の段階で目をつけ、それからずっと貞操帯をはめていたために、処理は出来ていない。

うっかりしていた。

「ここを出させると臭くなるし……：：：：どうしようかな……：：：：まあ、いいか。たぶん大丈夫だろ」

本来なら、他のメイドかメイド長の藍子を読んで処理させるべきなのかもしれない。

けれど、正直面倒だったからだ。

「そういえば、この液体を作った開発者からできれば試して欲しいって実験があったな。ついでにやっちゃおう！」

大義名分も思い出したので、僕は続行を決める。

「ある意味、これも貢献だしねー。……：：：：無事に終わったらこの子にご褒美をあげてもいいかもなあ」

僕はそう独り言を呟きつつ、アナルプラグにローションを垂らし、手で良くプラグにローションを馴染ませた。

そして、がに股で固まったまま動かない彼女の後ろに回り込んで、そのアナルプラグを容赦なく彼女の尻穴に押し込んでいった。

身体の大部分が特殊なテープによって拘束され、動けな

い彼女の身体の中で、唯一彼女の意思で動かせる肛門の括約筋が、震える。

まあ、震えただけで、何をどう感じているか、僕にはわからなかったただけだね。

お尻の穴に、固くて太いものが押し込まれてきます。

(んぎっ……：：：：ぎぎぎ……：：：：っ、ち、ぎれ、るう……！)

心の中で悲鳴を上げつつ、私はそれをなんとか受け入れるべく、肛門の力を抜くことに全力を注ぎます。力を抜くのに力を注ぐというのもおかしな話ですが、そうとしか言えませんでした。

その甲斐あってか、押し込まれる抵抗感が急に和らぎ、代わりにお尻にずっと何か刺さっているような異物感が残りました。

恐らくアナルプラグの一番太いところが括約筋を通過し、細い部分を括約筋が締め付けているのでしよう。

この手のアナルプラグを刺されるのは初めてではないので、よくわかります。

わかりましたが、気になることもありません。

(うっ……：：：：でも……：：：：きょうは……！)

これまでそういった器具の挿入をする時は、必ずその前に浣腸をしてもらい、お腹の中身を全て出してから行っていました。

いまはそういった処理をせずに、アナルプラグが押し込まれてしまったわけです。

(大丈夫……なのでしょうか?)

そんな私の心配を余所に、身体の中に入り込んだプラグが、さらに大きく、太くなっていくのを感じました。

これもよくあるギミックなので驚くには値しません。

プラグが抜けないように、膨らまされたのだとわかるからです。

とはいえ、理由がわかったところで、感じる内容に代わりはありませんでした。

(あう……うう……おなか、が……っ)

ただでさえ大きなプラグで異物感が凄いところを、さらに膨らまされた結果、私は激しい便意を感じてしまいました。

毎日処理が行われるこの館ではまずないことですが、便秘の時に排泄物がたくさんお腹の中に溜まっている時のような、そんな危うい状態になっています。

しかし、いくら出したくなっても、もうプラグは私の穴を完全に塞いでしまっています。

どれほど渾身の力を込めて力んだところで、プラグを押し出すことは出来ないでしょう。

行き場のない苦しみがお腹を中心に広がっていきます。それがただの前座でしかないことを、私は知りませんでした。

指先一つ一つに至るまで、完全に拘束されたまま、声もなく悶えていると、お腹の中に若干冷たい感覚が入り込んできました。

この屋敷で使われている大抵のプラグには浣腸をし、排泄をさせるための機能があります。恐らくはそれなのだと思われましたが、その注入される液体の勢いはいまだかつてないものでした。

(あぐっ……うあ……おあ、ぐ……っ)

どンドンお腹の奥へと入ってくるその液体は、恐らくは形成されつつあった便も巻き込んで、私の体内を埋め尽くしていきます。

テープを巻かれ、拘束されている私はお腹を膨らませることもできないため、圧迫感を伴う苦しみがひたすら高まっていていました。

(し、しんじやう……っ)

内心で誰にも伝わらない泣き言を言うしかない私でしたが、突然そのお腹が少しだけ楽になりました。

一体何が起きているのかわかりませんが、どうやらテープによって締め付けられていたお腹が、膨らんだようです。ご主人様が手でお腹を撫でてくださり、その感覚でわかりました。

(あ、そうか……テープの、お腹の部分だけ、柔らかくしたんですね……)

私の身体を締め付けているのは、特殊なライトを照らすことで固くなったり軟らかくなったりする液体を含んだテープです。恐らくはお腹の部分にだけライトを当て、膨らむようにしてくださったのでしょうか。

そのことにほっと一息をついた私でしたが、そうして生まれた余裕は、一瞬でなくなっていました。

(お腹、が……破裂、しちゃいます……っ)

ご主人様がお腹を撫でてくださったっているので、その輪郭がどんどん膨らんでいるのがわかります。二リットルとかそういうレベルではなく、明らかに普通の浣腸を上回る分量が注がれているはずですよ。

出入り口が塞がれている以上、このままではお腹が破裂してしまおうでしょう。

死への恐怖が沸き上がってきました。

その私の気持ちを汲んでくださった、というより元々そろそろ止めるつもりだったのでしょうか。

ご主人様の手が離れて行きます。同時に、注入も止まったようでした。

お腹がずっしりと重くなっていて、足の部分のテープが硬化していなければそのまま倒れていたかもしれない。

(く、くるし……ださせて……ください……)

お腹がはち切れそうな痛みを発し続けています。

その痛みはじりじりと高まり、テープで覆われていなければ、今頃私は地面をのたうち回っていたことでしょう。

ですが、出させてもらえることはありませんでした。

急にお腹の重みが楽になった、と同時に、いままで以上の苦しみがお腹から発生しました。まるでお腹の中で長い物が蠢いているような、そんな苦しみです。

(な、なに、なにがっ、おきっ)

何が起きているのか、私には全くわかりませんでした。

軟らかくしていたお腹の部分のテープに、特殊なライトを当て硬化させる。

ポテ腹状態になっている彼女のお腹がテープによって保たされ、少しは楽になったんじゃないかと思う。

まあ、外側が硬化したことによって固定され、楽になると同時に、体の内側はより大変なことになっていることだろう。

(ほんと、こういうのを作れる開発者はずいよね)

彼女のお腹に注ぎ込んだ液体は、普通の浣腸液ではなくライト用いると硬化する特殊な液体だった。

この液体は飲んだり食べたり、直接腸に触れたりしても成分的には大丈夫だとされている。

さらには、他の物体や液体——例えば便——と混ぜても効果を發揮する、とされていた。

ただ、そのデータは少なく、可能ならそのデータを取ってほしいと言われていたのだ。

(成分的には大丈夫……腸内の便と混ぜることによって形状が変化しなければ、たぶん大丈夫だよ)

基本的に、布などに浸して硬化しない限り、この液体そのものにライトを当てると、液体は球状もしくは楕円形状になることがわかっている。

水槽に満たした液体にライトを当てれば、その水槽の形状に沿って可能な限り球形になるのだ。

細長い試験管のようなものに入れた状態で固めた場合、どうなるかという、細長い楕円形上に固まる。

つまり、その性質を考えれば、いま彼女の腸内は、腸内の形に硬化した液体が満たしているということになる。

ただ、あらかじめ浣腸をして何も無い状態にしていたわけではないので、もしかすると生成されつつあった便と混ぜり合った結果、形状がとんがったものとなり、腸内を傷つけたり、突き破ったりするかもしれない。

最初の予定にはなかったが、彼女の罰則はその実験を兼ねることになったのだ。

「いい結果を出してくれよ？」

僕は膨れ上がった彼女のお腹を、掌でぼんと叩いた。

いずれにせよ、さぞかし、得体の知れない感覚だろう。

「後ろはこれで終了……最後は、前だね」

クリトリスからいじめるか。

それとも尿道を先に抉るか。

少し悩んだ末、僕はその器具を手に取った。

身体の中で、蛇が蠢いているような感覚でした。

膨らまされたお腹の中、注がれた浣腸液らしきものが不思議な形に固まってしまったのだと思えません。

振動する機能はないはずですが、私のささやかな動きに連動しているのか、少し括約筋を緩めたり締めたりするだけでお腹の中全体を抉られるような感覚が生じます。

まるでその度にお腹の中を掻き回されているようで、非常に気持ち悪く感じました。

そんなお尻への作業は終わったのか、ご主人様は次の場所に対する責めを開始するようです。

正直、胸とお尻の穴に対する責めだけで気が狂いそうになっていきます。これ以上刺激を加えられるとすると、正気を保てる気がしません。

(もうお許しください……ご主人様……つ)

そう心の中で叫びますが、もちろんそれがご主人様に通じることはなく。

突如、股間から凄まじい衝撃が突き上げて来ました。

(オウツ、アツ、あああつ)

身体が暴れようとして勝手に波打ちます。全身が固定されていなければいまの一撃でひっくり返って気絶していたでしょう。

それくらい、そこからの刺激は凄まじいものでした。

女性の性的急所のうちのひとつ——クリトリスが、吸引されたのです。

引き出されたそれは、凄まじい刺激を生じさせていて、真つ暗な視界に星がちかちかと瞬くほどでした。

これまでの刺激で十分硬くなっていたであろうその場所を吸い上げられ、さらに刺激に敏感にさせられます。

クリトリスに吸引器を被せられたのであろうということ はわかりましたが、その衝撃は想像以上でした。

(うあ……ああ……も、もう、これは、以上は……っ)

恐ろしいのは、これで終了ではないということです。

かつて取りつけられた吸引器には、クリトリスに対する 刺激を与え続ける仕組みがありました。

この吸引器にその仕組みがないわけがありません。

まだそれを起動するのは早いということなのか、ご主人様は別の場所への責めに移行するようです。

今度は、純粹な痛みが股間から発生しました。

(いつ、っ……ッ……こ、これは……まさか……っ)

なんとなく痛みがどこから来ているのかわかりません。

これは恐らく、尿道へカテーテルが差し込まれているのでしよう。回数こそ多くありませんが、そこに対する責めの経験もありましたので、なんとか把握することができました。

ご主人様がなにやら作業しているのが、身体への感覚でわかります。これまでに比べればささやかな、内側を引っ張られるような感覚がしました。

カテーテルの先端が内側で膨らんで、抜けないようになったのだと思います。

ひりひりとした痛みが、そこから感じられました。これまでの分の感覚が強すぎて、ほとんど感じていないのも然でした。

そしてついに、ご主人様の責めは、最後に残ったその場所へと移行します。

一端カテーテルの先端を脇に避けておき、最後に残った場所への責めへと移行する。

本人が見れば青ざめていただろう。規格外の大きさと太さをしたバイブを手取る。

そのまま突き刺すのはさすがに危ないかと思っただけ、彼女の秘部は滴り落ちるほどの愛液を分泌していた。

「気持ちいい感覚より、痛みの方が勝っているはずだけだなあ……薬がよっぽどよく利いているってことかな」

これだけ濡れていれば、ローションを追加で足らす必要はなさそうだった。

秘部の入口に、バイブを擦りつけて愛液を馴染ませていく。久々の純粋な快楽を感じられる刺激だったからか、ますます激しく、その場所が濡れ始めていた。

「よし、これで良さそうだね……んじゃ、いくよっ」

僕は持ち手を握りしめ、彼女のその場所を割り裂くようにバイブの先端を押し込む。

彼女のそこは、どんだん奥へと飲み込んでいった。

持ち手の部分は数センチを残して外れるようになっていて、奥まで差し込んで持ち手を外す。

最後の仕上げに入ろう。

入口が愛撫される感覚に、狂おしいほどの快感を覚えてすぐ、擦りつけられていたその軟らかくて硬いものが私の中に入り込んで来ました。

ご主人様はよほど太いものを選んでくださったのか、身体がそのバイブの形に合わせて押し広げられていくのかわかります。

もしもそういったものを入れられた経験がない処女であったならば、激痛に悶絶していたレベルであることは間違いないありません。

ですが、私はご主人様によってすでに調教され尽くしたメイド。

当然その穴も十分に開発済みであり、私は普通なら泣き叫んでしまう太さのそれをやすやすと飲み込んでしまいました。

バイブの先端が奥に当たっている感じがします。

お腹の中を色々なもので満たされている状態ゆえか、かなり苦しい感覚はしましたが、なんとか耐えることが出来ていました。

最後に、貞操帯らしきものが装着されます。見えてはいませんが、感じる事ができれば十分でした。

私の体型に合わせて作られているらしい、金属のパンツが、二つに分かれた状態で、前と後ろからはめ込まれるように重ね合わされます。

パンツの接合部はぴったり合わさるように工夫されており、股間はそれによって完璧に封じられてしまうのです。

カテーテルの管などは外に出され、貞操帯によって固定されます。

(相当長い間、このままということですね……)

貞操帯にはそのための機能があるので、これから何日間拘束されるかはわかりません。

果たして私は解放される日まで正気を保つことが出来るのでしょうか。

ふと、脳裏にお昼に出会った親友の顔が浮かびました。
（ごめんなさい、まゆこ……約束、果たせないかも……）

そのイメーは、不意に訪れた股間を中心とした衝撃に容易く掻き消されてしまいました。

透明なブラや貞操帯の上からテープを追加で巻くことで、無様な格好をしたミイラを完成させる。

一部飛び出しているチューブなどは不格好だけど、それは彼女を生かすためのものだからさすがにそれまで外すわけにはいかない。

生殺与奪は握っていても、僕の意味で気軽に奪えるわけではないのだ。

鼻に突き刺したチューブには、流動食を流し込む装置と、呼吸を管理する装置をそれぞれ繋ぐ。

股間の尿道に繋がっている管にも専用の機械に接続し、準備完了。

ちなみに彼女の膣内に入れたバイブは、貞操帯に埋まり込んで充電が可能になっているため、動きが止まることはない。

全ての準備を終えた僕は、恥ずかしい格好で立つミイラのようになったメイドの子を、満足して眺めた。

あとは全て機械がいいようにやってくれる。
「これでよし、と。それじゃあ頑張つて数日間生き残つてね。精神は死ぬかもしれないけど。まあ、大丈夫でしょ」

もし壊れたらそのときはその時だ。

僕はそう考え、全ての道具の起動スイッチを押した。

その瞬間、凄まじい音を立てて彼女の身体が震えたけど、硬化したテープは一切彼女に動くことを許さず、ただその場に立たせ続けた。

口は塞がっているのに、呻く悲鳴が聞こえて来ていたけど、僕はそれを無視して、部屋の電気を消し、部屋から出て行った。

他のメイドに命じて、定期的にチェックさせる段取りを頭の中で組み立てつつ、重い鉄製のドアを閉めた。

大きな振動と音を立てて閉まったドアには、「実験室」のプレートがかかっている。

身体の芯に存在するものが震え始めると、全身にその振動が伝播して、とんでもない衝撃を生じさせました。

（あがつ、ががつ、ぐあえっ！）

一番酷いのは胸でした。わずかな振動も凄まじい刺激になる状態にされているそこに、バイブの振動は強すぎる刺激です。

結果として、胸が爆発しそうなほどの激痛が生じ、おかしくなってしまった私の頭は、それをとんでも強い快感として受け取ってしまった。

バイブの振動は貞操帯を通じ、後ろの肛門に突き刺さったプラグにも伝わっていました。

それだけなら、大した刺激にはなりませんでしたが、プラグからは例の硬化する液体によって構築された、腸の形に沿って出来たものが伸びています。

プラグが振動するということは、それもまた振動するということ。

私は身体の中をかき混ぜられるような衝撃を感じ続けなければなりません。

身体を暴れさせ、のたうち回りたくても、私の身体は一部も隙も無く硬化したテープによって覆われています。

私は立ったまま、身動き一つ取れない牢獄に捕らえられているのです。

暴れ回る衝撃を、すべて自分の身体で受け止めなければならず、その衝撃を受け流すことも紛らわせることもできません。

その上、それらの衝撃は薬の効果によって、全て快感に転化させられているのです。

私は気が狂いそうな——いえ、すでに狂っているのかもしれないませんが——快感の中、何度も絶頂に追いやられました。

何を考える暇もありません。憎たらしくもバイブはその振動パターンをこまめに変え、私に慣れさせてくれないのです。

何度絶頂したかなんて、数えるのも無駄でした。

時間の概念や思考や記憶がドロドロに溶けて行き、そして、恐らくその時、私は。

完全に狂ってしまったのだと思います。

後日談 封入されるメイドたち

数日後、解放された七番のメイドは正気を失っていた。

全ての責め具を取り外し、しばらく休ませて呼びかけてみても、意味のない言葉しか口にせず、快楽を求めてか自分の性器を所構わず弄りだすようになってしまっていた。

医者にも診せたけど、精神を病んでしまっていて、現代の医療で元に戻すことは不可能だと言われてしまった。

肉体的な意味での治療はかなり進んでいたけど、精神に関する分野は中々研究が進んでいないのだ。

彼女を普通の方法で元に戻すことはできなかった。ただ、彼女の実験結果は大きな貢献をもたらした。

硬化する液体を染みこませた布を素肌に貼り付けた状態を長く続けるとどうなるか。

便と混ざった硬化液がどんな性質を持つようになるか。硬化した液体で腸を満たした場合、健康にどう影響するかなど、今後のために有用なデータがいくつも取れたのだ。

そのデータを受け取った硬化液の開発者は、有益なデータだとしても喜んでくれた。

彼女のデータは今後、さらなる技術の発展に寄与するかどうかだろう。

特権階級の行動の結果、肉体や精神が崩壊した者は、医療の発展のために病院に寄付するというのが基本だ。

そこで人体実験紛いの臨床実験を繰り返して、消費することになっている。

ただ、精神が壊れたまま使い続けることも出来なくなっている。その判断は各特権階級の者の采配に任されている。

僕には理解できないが、特権階級の中には、そうやって精神が崩壊した者ばかりを集めて楽しんでいる者もいるという噂もあった。

そして僕は、そのいずれも選ばなかった。

彼女の貢献度合いは非常に大きなものだったし、元々廃棄するつもりはなく、罰則のつもりで行ったことだ。

だから、僕は。

「お願いします。彼女を気が狂う前の状態に戻してあげてください」

そう『あの人』にお願いした。

その結果、現代医療ではどうにもならないと医者に匙を投げられていた七番のメイドの彼女は。

「あ、あれ……？ 私、は……？」

あっさりと、正気を取り戻した。寝かされていたベッドの上で身体を起こし、不思議そうにしている。

僕は彼女に向かって微笑んだ。

「おはよう。今回はご苦勞様。まだまだ、よろしくね」

呼びかけられた彼女は、一瞬何を言われたのか理解していない様子だったけど、言われた内容はちゃんと理解できたように。

「え……？ あっ、は、はい！ もちろんです！」

そう言って、ベッドの上で正座をし、僕に向けて頭を下げるのだった。

彼女は全裸だったので、裸で土下座しているなんとも扇情的な姿になっていたのだけど、必死な彼女はその事に気付いてもいないようだった。

「うん。それじゃあ、あとで今回のことに関するレポートを書いて提出して。どんな感じだったか知りたいから」

そう水を向けたことで、彼女は自分がどういう状況にあったか思い出したらしく、その顔を一瞬で青くさせた。

しかし、ご主人様の命令は絶対である。

「は、はい！ わかりました！」

気が狂う前に戻ったとはいえ、一度精神崩壊をさせられた相手に対しても尽くす姿に満足しつつ、僕はあとのことはメイド長の藍子に任せ、執務室へと戻る。

階級制度を作った『あの人』に対するお願いは、世の中への貢献度によって出来る回数が決まっている。

完全に狂っていたメイドの子を即座に正気に戻したように、普通なら出来ないことを出来る切り札だ。

それをいつでも使えるように、僕は僕のやれることで、この世界に貢献し続けなければならない。

主人としての度量は、ちゃんと確保して置かなければならないのだ。

こうして、狂ってしまったはずの私は、再び日常に戻ってることができました。

狂っていたという間のことは、私自身は全く覚えていません。ですが、気付けば驚くほど日が経っていたので、私が正気を失っていたのは確かなようです。

狂うに至った経緯は臆気にしか覚えていないのですが、ご主人様が満足そうにしていらつしやっていたので、きっと壮絶な経緯だったのでしよう。

そうだとすると、ほとんど覚えていない、というのは幸運な話なのかもしれません。

狂う時の感覚まで覚えていたとしたら、とても平成ではいられなかったかもしれせんし。

ともあれ、私はその日も一日の業務を終えて『封入回廊』と名付けられた廊下に戻ってきました。

すでに今日解放されていた館のメイドたちが全員集まっています、裸で立っています。

メイド長が最後の確認をして、それぞれが封入される透明な人型の中に立つように命じられます。

イヤホンを兼ねた耳栓をして、準備は万全。

「それでは皆さん、本日の業務お疲れ様でした。良い夢を」

淡々としたメイド長の挨拶と同時に、真つ二つになって開いていた透明な人型がゆっくりと閉じていきます。

メイドたちはそれに合わせて微妙に立つ位置などを変えつつ、封入されていきました。

全身を挟まれて圧迫されるこの瞬間は、なんともいえない感覚です。

(ん……っ、もう動けない……)

最後に、ぷしゅっ、という空気の抜ける音が響くと、私たちは完全に透明な人型の中に閉じ込められることになりました。

こうなると指の先くらいしか動かすことは出来ず、次に解放される時まで、私たちはじっと待ち続けなければなりません。

透明な人型が体温に馴染むまでじっとしていると、やがて人型の温度は適切になりました。脱力してリラックスします。

何気なく指先を動かして自分の股間をまさぐりました。すると、その場所がすでに汗や尿とは違うもので濡れているのを感じます。

(……なんだか、感じやすくなっちゃいましたね)

いままでは自慰をするまでは濡れたりしなかったのに、いまの私はこうして人型に閉じ込められるだけでそこを濡らしてしまうようになってしまいました。

記憶にはありませんが、身体が似たような状況で感じた

記憶をきちんと覚えているのかもしれない。

いづれにせよ、興奮したままでは寝られませんので、自分で自分を慰めて、すっきりしてから眠るのが最近の日課になっています。

「ん……っ、ふぁ……あ……ん……」

自分しかいない空間に、押し殺された嬌声が響きます。

興奮することによって体温が上がり、窮屈な人型に封じ込まれた私は、静かに悶えています。

恐らくは他のメイドの中にも、同じようにしている者がいることでしょう。

声も聞こえず、姿も見えませんが、仲間が傍にいるという安心感を覚えつつ、楽しみながら眠りにつくのでした。

その日見たのは——親友と一緒に、広い景色を見に旅行にいく夢でした。

改変された世界の片隅で

～メイド・犬山チトセ編 おわり～



あとがき

本作をご購入いただき
誠にありがとうございます

まずはこの作品を作るにあたってお世話に
なった方々に感謝を。

特に、前作に引き続き素晴らしいラバー質感と、
「古ぼけた商店街の背景がいい！」などという
筆者の我が儘を聞いてくださったTiasti様には
無上の感謝を捧げさせてください。
(発行が遅くなって申し訳ありませんでした！)

改変世界シリーズは、再び幕を下ろしました。
しかしまだ書いてみたい内容がたくさんあります。
おいおい取り掛かっていきますので、
期待してお待ちください！

他にも色々な作品を書き進めておりますので
そちらも、ぜひ読んでください！

それでは、またどこかでお会いしましょう！

奥付

「改変された世界の片隅で
～メイド・犬山チトセ編～」

サークル名：ヤマタノサクラ

小説：夜空さくら
表紙絵：Tiasti

発行：2019年2月1日

問い合わせ、感想、ご意見はツイッターへ
(夜空さくら：@yozorasakura)

○無断転載・WEB上へのアップロードは禁止です。